

---

# 異世界統治日記

藍幻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界統治日記

### 【Nコード】

N0494X

### 【作者名】

藍幻

### 【あらすじ】

オタクのイケメンチ ト兄貴のせいで異世界と一緒に飛ばされた颯は、兄が対災厄の勇者になって旅する間に何だかんだでライトフィナル侯爵領代理領主になります。現代日本みたいな状態なライトフィナルに、最新兵器と名産品で公社設立、とある理由で開通出来ない超優良交易路開通と雇用創出。問題山積の閉鎖都市を豊かな独立小国並みの体制を目指して！そして災厄や空気読めない敵も蹴散らして今日も今日とて戦います！！

## 主要登場人物設定

登場人物

主人公達

瀬戸霧 颯

年齢19歳

身長172cm

体重64kg

職種自衛官 聖騎士、領主

兄と違い可もなく不可でもない平凡な顔立ちで目つきが鋭い。しかしたまにほわっ、と目つきが柔らかくなるのを目撃した女性の大半は心揺さぶらせ惚れさせる天然たらし

兄の魔法陣実験が予想外の大成功で異世界に来た。

自衛隊では、普通科、機甲科偵察、通信科を始め、中即連、特戦群、空挺団など特殊部隊から声がかかる程の精鋭。

しかし本人は全く興味が無い。

何だかんだでナルシヤンから領主任命されたり、聖騎士になったりと仕事はどんどん重くなってきたる苦勞人。

人を殺す覚悟は既に出来ている。

後に隠れた崩壊寸前のライトフィナルを救う人物になる。

瀬戸霧 稔

年齢21歳

身長175cm

体重59kg

職種、社会大学歴史部崇拜学科学学生 勇者

高校時代にはまったヲノベから二次元世界、異世界に旅立ち希望で元々興味あった魔法陣で本当に異世界勇者になった男。

イケメンで偏差値は75、しかし魔法陣完成の為なら手段を選ばず、

偏差値50の大学に通う。

ハレムを希望するが、性奴隷やら貴族の媚びの献上品には手を出さず丁寧に保護して然るべき所に返す人。

勇者と驕らず、忠告はしっかりと聞き、国民の為なら命を投げ出すのも躊躇わない中までイケメンチト。

ライトフィナル組

サラ・シユテイル

年齢20歳

身長155cm

体重43kg

B・W・H80・55・65

職種メイド 颯の側近魔術師兼メイド

旧姓メルシャン

メルシャン一族の掟を破られた忌み子、軟禁生活の後追放、経歴名前を詐称してメイドの仕事に就いていた。

実力が認められ登城、「無理やり人事で」ナルシャン専属メイドになる。

ナルシャンの計らいで颯の側近になってからは恵まれた魔術師の才能が発揮される。基本的に忠誠に厚く慈母のように優しく、簡単に人を恨めず、助けられる命なら自分の素姓がバレても構わないという人。

スフィア・セルドリック

年齢19歳

身長165cm

体重52kg

B・W・H72・61・70

職種、セルドリック家筆頭騎士

白き愛国者の名のごとく、騎士として国とライトフィナルへの愛

国心は作中最高。常駐戦陣が座右の銘  
面倒見が良く心配性。颯が勝手に動くのは自分達が不甲斐ないから  
なのかと自虐的な部分もある。

魔術でしか削れないほど堅く、血まみれでも簡単になまくらになら  
ないグラ レム鋼の超重量級の大剣を難なく扱う。

胸はつつましやかだが、鍛え抜かれたすらりとした脚は一部のマニ  
ア歓喜もの。

人間の血を浴びると、とたんにトランス状態になり、紅き死神と呼  
ばれるように白い鎧が真っ赤に染まる。原因は幼少に無理やり志願  
した山狩りで覚醒した戦争嗜好症「トリガ ・ハッピー」と思われ  
る。

ソニック・ハリ

年齢21歳

身長180cm

体重80kg

職種、ハリ 家筆頭騎士

でかい図体からは想像出来ない素早さは閃光の異名を取る。

淡々とした感じで口数は説明以外では少ない。しかし内に秘めた炎  
は未知数。一度決めた主人には絶対に付き添う。

なまくらになりやすく、高い切れ味を發揮し軽量なダンデム合金を  
使用した剣というより刀を愛用する。

スコット・ラット・ラルツ

年齢18歳

身長170cm

体重65kg

職種、ライトフィナ ル王宮派遣騎士 颯の側近騎士

メンバーの中で唯一平凡な平民騎士。しかし潜在力は高く、若くして王宮外部親衛隊になれる実力者。

歴史が好きで、それだけなら上級の学園に進学出来るレベル。

基本的には、颯というより直接の上司スフィアに忠誠を誓っている。

王城組

ヘレッツリ ・ ナルシヤン

年齢27歳

身長169cm

体重55kg

職種、元聖十字教会司祭、現宰相

飄々とした感じの人間だが、根回しと政治能力、司祭で身につけた人身掌握は最強。

権利が無かった宰相が、今では重要ポストの一つにした成功者。

温厚に見えるが、それは仲の良い人のみ、実際は…

最強の魔術師と最強の攻撃人をメイドとして擁した凄い人

ニミッツ・シユガ

年齢22歳

身長160cm

体重42kg

B・W・H65・52・60

職種ナルシヤン専属メイド兼護衛

しなやかな体から繰り出す体術の連撃と天性のナイフ捌きは一級品  
詳しい過去はナルシヤンと彼女だけの秘密なので後の更新で分かっ  
ていく。

正直胸は邪魔な存在と思っているので、薄くても気にしていない。

ドライな性格から、近寄り難い雰囲気を感じるが、本編には関係無  
いが実際は出来の悪い見習いメイドの教育をする時は、何度でもさ  
じを投げずに指導して一流に仕立てたツンデレさん。

ナルシヤンの事は命を賭して護衛する対象であると同時に恋愛感情を抱いている。

どんだん活躍予定の人

セルテイリア・ミル・テゼ

年齢20歳

身長154cm

体重48kg

B・W・H99・54・80

職種セルシオ学園学生 ライトファイナル一等文官

抜群のプロポーションと不格好なメガネでも隠しきれない最強の美人顔を持つ女性。

サベルレピア五大貴族の一つ、テゼ家の四女。しかし愛情は全て年子に奪われた為、才色兼備なのに人間観察が趣味ということから遠巻きにされる存在。

その異常さは颯達のチム、特に颯、サラ組の信頼関係を見て自慰以上の強烈な性的快感を覚える程。

そしてその信頼関係の変化を見届ける為、学園早期卒業の四年生の初任給でも安月給と認識されるライトファイナルに八年生首席卒業で入官する。

性格は一度決めたら徹底的に、颯、サラの関係が面白い限りは絶対服従。

今後の内政編で素晴らしい調査と交渉術を發揮する。

稔の従者組

スノーザ・レクティクル

年齢25歳

身長172cm

体重54kg

B・W・H 86・60・74

サベルレピア最精鋭、シルフィード騎士団団長にして稔の教育係でもある。

騎士としては軽装で忠誠に厚いかと問われれば不明だが、最強クラス。いや現時点でまともに戦える人は大陸全土でも居ないに等しい。性格は姉御肌で面倒見が良く、スパルタだがきちんとやればそれ相応に優しい対応をして稔は見事に惑わされている。

メリアス、ナミル・リネ姉妹

年齢 15歳

身長 143cm

体重 35kg

B・W・H 74・58・60

ブランティア帝国最強の双子魔術師。

メリアスの膨大な魔力にナミルの完璧なコントロールが加わり最少で最高位の能力を得た。

性格は大人しく、15歳とは思えない童顔さは保護欲をそそり、出てる所もあるので、一部の人は歓喜している。

今後色々面倒な人達

サチエ・メルシャン

年齢 42歳

身長 155cm

体重 46kg

職種、メルシャンサベルレピア分家の妻

メルシャン一族に高い誇りと忠誠を誓い、高等攻撃魔術を得意とし、他の全分類の魔術も基礎を完璧にして強化している才女。見た目は派手だが、全体的支出は分家の中では安い。

気に入った従者には階級関係無く重用して柔軟。世間の無知さもあがるが、魔術は人の為と攻撃は魔獣か重罪人に限定しようとする。

が  
だめんずの夫や息子達に甘く、どうも締まらない。  
そしてサラをメルシヤンの面汚しと認定して徹底的に排除しようとする思想を持っており、同様にナルシヤンとも喧嘩する。  
結果的には悪女の方に傾いているが今後は…？

ハウズ・バニア

年齢18歳

身長177cm

体重61kg

職種サ チェ側近兼参謀

若くしてサ チェのお付きになった男。

小さい頃に武術で護衛主体の家ながら軟弱だったのを親に失望されて傷ついた過去があるが、サ チェに救われた経歴がある。

淡い恋愛感情を抱いており、今の立ち位置に満足して幸福だが、これからのメルシヤン分家改革のりダ になり、君主をサ チェにするため奔走する。

## 世界観設定

### 世界観設定

サベルレピア王国

サベル戦士のザクス・サリア　ズとレイピア女性騎士のソリユーション・フェリアが建国した王国。

現在は三世のサルバトーレ・サリア　ズが国王

現在の人口は約1200万人を越える人口と領土ならそれなりに大国、しかし国土ね大半は山岳地帯、経済は高いとは言い難く、総合的分類は中堅国家。

手先が器用な国民性で、マスケット銃に適した平野の地形は少ないのに銃を大量生産、輸出した不思議国家。

主な産業はアルテリア法国の必要物資を高値で売る交易と、材木や大理石、資源を輸出している。強化禁止と、追加生産制限の条約で最近では生産がめつきり減った銃職人が手工業を初め、その精密さは世界でも有数。

王立正規軍

兵員数12万人

銃の一大生産地の国の国防軍だが、山岳の地形上マスケット銃の戦列歩兵より山の中を駆け巡り、念話だけ使えるようにした兵士を通信兵にしてゲリラや散兵戦術を好む。魔獣がどの国よりも多い為、被害を防ぐ為に常時どこかで常備軍と共に魔獣を撃退している。そのためか、兵士の質は精強と名高いが、残念ながら、中央王都周辺の平和地帯は、討伐旅団以外常備軍任せにして錬度は低い。

主力は騎兵と刀兵、近年縮小されつつあるが、銃に比べ速射と命中精度の高い弓兵旅団も存在する。

#### 領常備軍

基本的には統治貴族が管理する準軍事組織。

規模は200〜1万までと、貴族によって違う。

主任務は、領内魔獣撃退及び警察業、場合によっては正規軍と共に国土防衛にあたる。

実は王都守備軍は王族直轄の常備軍で、最近の直接指揮権は宰相が持つ。

#### 王都守護隊

王都守備軍とは違い、王立正規軍の精鋭で編成された王都近衛部隊、本編登場はまだ先。

#### シルフィード騎士団

団長スノーザ以外は構成は極秘で、団員名簿は存在しない。

また本部もどこにあるかも、国王とそれに類する者にしか知らされていない。

#### ライトフィナル

四方、連山で囲まれた天然要塞、ドナツ状でその中で暮らしている。

ライトフィナルまでの道は一本しか無く、閉鎖的であるが、中の民は隣人を大切にして朗らかである。

しかし、特産のマスケット銃作りが廃れたり、内需だけでは賄い切れない労働人口など、仕事が無く、少子高齢化という悪循環に陥る寸前。

後に颯によって改革が行われる。

ブランティア帝国

皇帝ガルス・ウィバを中心とした絶対王政国家

人口は6000万を越える大陸東の超大国

工業と軍事力は他を寄せ付けず、征討戦争も皇帝の独断で行われた。しかし結果は大敗で、最近には貧富の格差が埋めきれず、政治不信も相成って、少しずつ軍事併合された亡国の軍人が反乱を起こしている。

サベルレピアをクツシヨンに、西の大国シグラドと対立している。

シグラド帝国

皇帝フィリップ・シグを中心にして議会を持つ国家。

人口4800万の西の超大国

海から産出する塩を内陸部に他よりも安く提供して、シェア独占に成功、国家予算の3割を賄う。

貴族制度は早々に捨て、皇帝に忠誠を誓った者を土地の支配者にした。たり、軍管区制度で、軍の現状をスムーズに把握出来るようにしたが、平等を重視しすぎて、富裕層が税金分の待遇が無いということ。で、税金支払い拒否が相次いでいる。

サベルレピアをクツシヨンに東の大国ブランティアと対立している。

ハイアス自由国

サベルレピアの北西の国

元首、クルツ・ファベットの国

貴族制度無し、反聖十字教会、法律も重罪以外無いに等しい。

人口400万

しかし、表の世界を汚さないのを絶対条件に裏の仕事や薬品が多く

生産され、保有資産人口1人あたり、サベルレピアの3倍、ブランティアの4倍、シグラドの2倍であり、軍隊も人員が多い。サベルレピアとは対立してたが、突如交易を申し込み、道路建設、間もなく交易が開始予定。

ラグ ン大公国

サベルレピアの北に存在してた国

人口は当時700万

現在は災厄により消滅。

ペルテ帝国

統一戦争以前、大陸を覇権していた帝国

統一戦争の引き金は、暴君の皇帝に反発する民兵により政治不安が拡大、続々と独立する軍閥に歯止めがからず、帝国末期の政治範囲は半径100mも無かったという。

用語

統一戦争

ペルテ帝国崩壊から、次の大陸覇権を求めた大戦。

今から約230年前から100年前まで。

結局は、凄まじい人的損耗と、聖十字教会の仲裁で終戦に至る。

大陸人口は戦争前3億が、戦争後は2億まで減った。

災厄征討戦争

ブランティア帝国領に災厄が侵入する可能性があるとして、過剰になり災厄本体に遠征した戦争、大半はブランティア帝国、あとは小規模連合軍、聖十字教会で編成された軍隊。

結果は50日目で大敗、帝国の威信を失墜させる結果となり。勇者

反対の声明を出してた傲慢さはすっかり鳴りを潜める皮肉な結果となつた。

● 飛ばされて…（前書き）

え、勝手に消えて性懲りもなく帰って来た作者です。言い訳はしません。そしてお気に入り登録されてた方々の信頼を裏切りました事に深くお詫び申し上げます。

サブタイトルが変わってしまったって話がありますが、内容は変わりません。

消去前までの話を見ている方のために消去前の最新話のサブタイトルに つけます。

## 零 飛ばされて…

ここは何も無い光の世界、そこに男が2人、

「済まない颯！成功しちゃった！」

軽くやつちまった程度で謝るのは、テンプレのごとく、兄の瀬戸霧  
稔はイケメンだ…だがしかし残念なイケメンだ、

大学生活を送りながら、彼は奇術や魔術を三度の飯よりこよなく愛  
する男で、今回この空間に居るのは、兄の自室の床に描かれた魔法  
陣が発動されたのがきっかけだ。

ちなみに大学の学科名も歴史部崇拜科というオカルト学科、大学三  
年で既に大学院行きも決定してる秀才だ。本当、テンプレだ…  
そしてもう一つ…いや、本来の姿は…

「もういいよ、諦めた…」

どこか達観してるのは、自分、瀬戸霧颯である。

中学校卒業後、何気なしに受けた少年工科大学合格、猛者に揉まれ  
た後に、陸上自衛隊の首都隷下第1師団に配属されて二年目だ。

しかし実力は折り紙付きで、既に水面下では対馬守備隊、中即連、  
空挺団など名だたる特殊部隊が新配属先を巡り奪い合いをしている。  
たまたま帰省した時に、稔に捕まり、魔法陣を起動実験を、帰省毎  
のお決まりで苦笑しながら見てたら、道連れでこの有り様。

決して兄弟仲は悪くなく、暴走する兄をいつも苦笑しながら付いて  
回った。面白い人なので、いつまで見ても飽きません。忍耐無い人  
はキレると思いますか…。

「さて、ここはどこでしょう?!」

「うん、それ俺の台詞」

稔の言葉に颯が即答。

「一応は異次元回廊で、狭間を管理する女神の居住地らしい……ま  
さか真理を覗いて等価交換?! 右腕消失?!」

「うん、それ錬金術師、そして俺は空洞甲冑になるのか?!」

兄の妄言は時折吹っ飛ぶ。まあこの状況なら仕方ないが…  
その時、

「クスクス…面白い人達が来たわね…しかも志願者なんて600年ぶりくらいかしら…」

すうつと目の前に表れるのは…

「金髪ツインテロリキタ　　！！二次元万歳！理想郷！さらにくぎゆうう！！」

「……………」

稔が歡喜の悲鳴を上げて、颯は耳を塞いで兄を睨む。

そう、これが本性、兄は二次元をこよなく愛する男なのだ。

いや本当は本当にオタクでは無かったのだが、男子校時代にオタクをからかおうとライトノベルを読んでから、人が変わってしまった…今はこの通りこの女の子の声みたいいな…えと、く…く…そうだそうだ、釘宮病というのにかかっているらしい。ちなみに自分は二次元はあまり好きではない。

液晶の向こう側に行きたいと公言して憚らなかった兄は、元から趣味にしてた奇術で転送しようと躍起になっていた。

「あはは、なんか凄い人が来ちゃった」

女の子…いや、ここでは女神も困り顔だ。しょうがない。

「失礼、志願者と君は言っただけど、具体的にはどんな事が？」

颯が聞く。女神はにっこり笑って

「笑い顔もeもごもご」

颯は兄の口を全力を以て塞ぐ。

「大丈夫かな？それじゃ言います。この狭間は、勇者素質ありの人だけが通れる空間で、丁度あなたが魔法陣を起動させたほぼ同時に、勇者召還を願う者との回廊が繋がったのです！つまりあなた方は、異次元世界の勇者様です！」

「テンプレ王道キタ　　！！！！」

「黙れ兄貴イ！！」

もの凄い力で振りほどいた兄絶叫、颯もさすがにキレる。

「いつもなら強制送還だけど…、志願者はとつても嬉しいの。それで、2人も来ちゃったの?」

「ああ、兄の巻き添えだ」

颯は嘆息ついて女神も

「あちゃ、兄弟揃って、勇者資格と狭間通行出来る精神力があつたんだ…困ったな」

女神が少ししよぼんとする。

「ああっ！泣かないで女神ちゃん！何が困ったんだい！」

もはや紳士という隠語を捨てた変態なりかけの兄が言う。

「実はね、この勇者は、基本天界から力を授けるの、あなた方の世界というチートです。しかし、絶対規則で、一つの世界に一人まで、そしてあなた方は絶対に行き先の世界に行かないといけない。片方は天界の加護無しで生きていくの…」

女神はさりにしよげる。颯は

「なら話は簡単だ。能力は全て兄貴にやってくれ」

「えっ?!」

女神は顔を上げる。不覚にもその半泣きの顔が可愛く見えた。

「しよ、じき、勇者などテンプレなど、でもいい。ただ第二の人生楽しみ、異世界からの帰還方法探ささ」

「いいのか?颯?」

「ああ」

「イイイ ヤッホー!!!」

……、ちよつと早まったかなあ?

「……そう、じゃあお兄さんに加護をかけますね。それでは…」  
女神は呟くと目の前に大きな扉が出現する。

「これをくぐり抜ければ新世界です。頑張ってきてください」

「行くぞ!颯!女神ちゃんも元気で!!!フハハ夢の世界へ!!!」  
そう叫ぶと飛び込む兄。

「なあ…」

「なんでしよう?」

「あの兄貴の夢描く世界観か?」

「ええ、本気のテンプレ世界観ですが…あの方なら壊してくれちゃったりしちゃったり…」

「そう思う。さて、世話になったな、元気で」

自衛隊で磨かれた鋭い目でなく、入隊前の優しさ顔つきで笑う。

「ちよつと待って!」

「ん?」

女神は心なしか紅潮した顔で

「あの…名前は?」

「名前?瀬戸霧颯だ」

「ソウ…さんですか。私は女神というより狭間を管理する要員、セルテネリック・フェン・ニアレ ゼです、セルフエと呼んで下さい。あともし良かったら…」

すつと差し出すのは、ルビーのペンダント。

「これを?」

「多分加護が受けない分、必然的にハッピーエンドになるお兄さんだけど、あなたは違うから負けないように、これを通信機として私がアドバイスします!それ以外に意味なんて無いんだからねっ!」

何コレ…確か、同期が言ってたな…つ、つ…何だっけ?まあいいや

「ありがとう。大切にに使わせてもらうから」

颯はペンダントを首にかけると、そのまま扉をくぐる。

扉が完全に閉まったあと、セルフエは

「ソウさんに加護すれば良かったかな…」と呟いていた。

二話目に続く

## 現状把握は大事です

扉をくぐり抜ければ、そこは…

やはりと言つていいほどたくさんの方の魔術師の皆様。

てんやわんやと持ち上げられるのはあまり好きではない。そこに一人の長老らしき人が来て

「あなた様方が勇者殿ですね」

確認される様に聞いてくる。

「はい、自分は巻き添えで、ここにいる兄貴が勇者です」

「おおっ…あなた様が勇者様！」

彼は稔を敬うような視線、颯は一瞥して舐められた。

「くっ！女の子が居ないだっ？！」

小声で兄は何か言っている。周りは騎士と、魔術師らしき口を被った人物か…

「そういえば、自己紹介がまだでしたな、私はサベルレピア王国、魔導院聖典庁王室直属筆頭魔術師顧問、ゲルマ・セル・チャナルと申します。本当に勇者様、我が国を救って下さいませ！」

「お初お目にかかります、チャナルさん、私は瀬戸霧稔、勇者といえる働きが出来るか分かりませんが、やらせて下さい」

「おおっ！！」

ゲルマ他周りは歓喜の声を上げる。見事に出来る人モトになる兄、稔に颯は慣れた遠い目をする。ていうか役職名が長い！

「それでは早速で申し訳ありませんが、王と謁見をお願いしたいのですが」

「それは穏やかではありませんね」

「はい、召還が成功次第、すぐにお通しするよう」

ゲルマは急かす

「自分はどうすれば？」

颯が聞くと、ゲルマは思い出した…いやあからさまにそこに居たの

的ノリで

「おお、失念してましたぞ、失敬失敬」

棒読みしかもはつきり忘れた言いやがった。

OK、あとで絞めたおす。闇討ちしてやる。

「まあ、弟君は政治に詳しい宰相殿に聞くのがよろしいでしょう」

ゲルマがニヤリとして、周りからも嘲笑が聞こえる。気配から察するに、魔導師と派手な甲冑を身にまとう、恐らくは高位の騎士。

「了解いたしました。それでは道を教えてはくれませんか？」

「はいはい、それでは…そこに居る騎士に案内させましょう。おい！」

「はっ！」

見るからにやつれた甲冑を着る騎士が呼ばれる。一方、稔の周りにはこれでもかの数の高位騎士。

ちよつとキレてもいいよね？

「それではこちらへ…」

「ああ」

颯は案内役の騎士に従って前に進むとき、ゲルマの横に付く瞬間

「首を洗って待ってる…」

僅か0.1数秒、しかし殺意を混ぜた颯の牽制の一撃は、侮辱でゲルマの顔を紅潮させず、逆にあまりの迫力にとことん温度を下げた。

騎士に案内されて魔導院から出る。少し肌寒いので、秋か冬のどちらかだ

外は綺麗にまとめられた庭園、しかし所々に騎士や、それに準ずると思われる槍を構える兵士が多い。

「戦争さながらの警戒態勢だな…」

颯が呟くと、

「戦争は既に始まろうとしています…」

先導する騎士が言う、

「それは…どういう………」

「自分が話せるのはここまでです。後は宰相閣下にお聞き下さい」

「ん、分かった。…ところで、この庭の名前と、どこに向かっているか教えてくれないか？」

颯の頼みに騎士は快諾して切り出す

「ここは王城を中心とした政治中枢地帯で、この庭園は魔導院、王立軍院、民部庁、そして王城の真ん中にある、最大級の庭園なので、セントラルガ デンと呼ばれています。正式には建国した当時の王の名前を取り、ハ バレクト庭園です、今は緑が中心ですが、春には多種多様な花が咲き乱れで、一般開放されます。今だと…来月にはサリ ネという白い花がたくさん咲きます。」

「ほう」

颯が声を出す。こんなに広ければそれは凄いだろうな…。もう一つ質問しよう

「この国の名前の由来と、国の政治体制を教えてくださいませんか？」

「国の政治体制は詳しくはありませんが、まずこの国名由来ですが、我が王国は100年前までは数力国の国で統一戦争が起きていました…その時、最後まで残った国の両国の最高兵士、彼方サ ベル戦士、此方レイピア女性騎士、彼らは戦い続けましたが、同時になぜここまで血を流して戦うのか…そして当時も今も最強最大の隣国ブランティア帝国に対抗出来るのかという疑問を持ち、やがて彼らは国の統一の為、両国王家を滅ぼし、統一、民衆からの支持と、さらに戦いの中で恋に落ちてた2人は結婚、得物の名前を取り、サベルレイピアという名前になりました。今の国王は直系三代目です」

「新興王国…か」

颯は意外に新しい歴史に驚く。既に城の中に入っており、外観、中は豪華な赤絨毯が敷かれているが、廊下は迷路になって、天井に不自然な穴…多分有事にはトラップがあるのだろう、とにかく武人が

建てた城と納得出来る要塞みたいな感じだ…

騎士は続ける

「政治は、国王と魔導貴族議会、発言力は低いですが、一般民衆の市民議会の3つの決定機関が存在します。一般法令を定めるのが主に市民議会、条約、国家予算編成は事実上魔導貴族議会の独壇場、国難の場合強制執行ができ、絶対王制可能の国王です。貴族は、爵位によって土地を統治して、税収管理や献上、国家命令で公共施設建設、領民私兵で山賊など討伐を担当する統治貴族。商業成金の商業貴族、政治文官、外交、騎士などで名を轟かせ、領土より名誉と誇り、爵位、武勲によって国王から年俸を得る文官騎士貴族、ちなみに私は騎士でも、文官騎士貴族の募兵で騎士に入り、推薦でここに来た、平民騎士です」

「平民出身が騎士をしてるって……」

「昨今の国の状況で、精鋭なら何でも登用するシステムが出来たので……ああ、到着です」

騎士は苦笑したあと、すぐに顔を引き締めて扉をノックする。

「どうぞー！」

扉越しから聞こえるのは若い男性の声

「失礼します、勇者様とは違う一般の方が来まして、宰相閣下の所にお通しの命を預かり参上いたしました、どうぞ……え」

「あそこでは紹介しなかつたな、俺の名前は瀬戸霧颯、ファーストネームが颯だ」

騎士は少し気まずい顔をしてから

「申し訳ありません、ソウ様、自分は第2普通騎士兵団、王宮外部親衛隊、スコット・ラット・ラミスです」

「呼び捨てでいいよ、どうせ勇者の兄貴とは違い、平民だ」

「いえいえいえ！そういうわけには……」

「頼むさスコットさん、俺は現世でも使いパシリだったから」

「いや、それなら自分も呼び捨てで……」

「「いやいやいや」」

「あの、これ以上放置されるとさすがに寂しいかな？」  
颯とスコットが譲りあってたら、執務室から声が…、見ると若い男性  
「失礼しました！それではソウ様、どうぞ」  
呼び捨てにするよう訂正しようと思ったがやめといた。颯は宰相と  
呼ばれる男に目を向けると…

若いな…

第一印象はそれだけに尽きた。

20代前半にしか見えない整った顔立ち、短く揃えた茶髪の髪、蒼  
い目、身長は颯と同じくらいの男性。

服装はあのゲルマと違い派手でなく落ち着いている。

「初めまして、サベルレピア王国宰相、ヘレッツリ・ナルシャ  
ンです。まあ名ばかりになっていますが…スコット君も話を聞くか  
い？」

「いえ、自分は職務に戻ります…というより、機密情報は無闇やた  
らに話そうとしないで下さい！」

「君は口が堅いし、僕に協力してくれるからね。秘密の共有…どう  
？」

「頼みますからやめて下さい…：ホント宰相閣下は怖い…それでは  
失礼します！」

スコットは扉を閉めて、去っていく。

「あはは、スコット君、慌ててたね」

ナルシヤンは笑う。颯は我慢しようと思腹に苦笑いが顔に浮かぶ。

「ま、さて、それじゃソウだっけ？ここに座って下さい、サラさ  
ん、お茶をお願いね」

「はい」

ナルシヤンの言葉で、颯は彼の指定した席に座り、サラと呼ばれた  
メイド格好の女性が手際良くお茶を2人分注ぐ。

「さて、この国について御質問は？」

「単刀直入に、何故私……いや正確には兄貴が召還される事になったんですか？」

「本当に真つ直ぐですね……」  
ナルシヤン苦笑、そこにサラが無言でお茶を置く。颯は真正面に見て会釈する。彼女も少し微笑んで返す。

細い顔立ちに非常に綺麗な青髪、かなり美人な部類に入るが、一つ気になるのが、目が開いてるか分からない程の薄目だ。

「サラさんに見とれてないで話聞いてくれる？」

ナルシヤンはニヤニヤしながら言う。この人観察力高い。颯は前を向き

「で、話してくれるのでしょうか？」

「おっと、アクション無しか、まあいつか、説明させて頂きます。

40年前の災厄から始まります」

40年前、この王国の北に存在した中堅国家、ラグリーン大公国公都に災厄が降り注いだ。

災厄は、聖十字教会の聖典にも載っていない魔物で、瞬く間にかの国は災厄に吞まれ滅ぼされた。他国に逃げ遅れた死者数はゆうに総人口の3分の2に達したと言われている。

大公国をの中心から広がった闇は、他国国境線手前で止まり、災厄の中心、魔巢と呼ばれる所から出た災厄のの動きも止まった。

これが災厄発生の一週間ということから、「暗黒週間」と呼ばれた。

災厄の魔物の数は、我が王国が編成した、精鋭の部隊の一つ、対災厄調査兵団が約300名が命がけで大公国に越境した結果、約3000～5000、しかし、魔物は人は殺されるので除いた、魔獣、ドラゴンなどあらゆる生命体の心臓を壊し、首を主に刻印をして、外見は普通で中身は身体強化魔物の人形兵が数万体作られてた。

そういう魔物の滅し方は、刻印を壊すか、槍や剣でバラバラか、最後は魔力を込めた鉄砲の弾を数発撃ち込むという。練度が高く必要な事ばかりでした

我が王国を始め、今までは有事には徴兵中心から、予算が大分増えなくても、魔物からの恐怖解消の為、常備軍の大規模増加、そして統治貴族にも独自の兵団を作らせた。

そしてもう一つ、例え兵士を増やしても国民は絶対的安心感を欲した、さらに、わが国初代の王、王女崩御でさらに不安が募り、議会は思慮を重ねたうえで、8年前、正式に決まったのは

「異世界の人間を勇者を立てて、国民の安心と秩序を保たせる」

「3年前までなら当たりです」

「3年前に何があった？」

ナルシヤンはお茶を飲み、間を置く。ちなみにこのお茶は日本茶に似てて非常に美味しい。

「3年前、勇者召還をしても彼らに与える試練が上手くいかず、勇者候補として召還された者達はたちまち精神崩壊か、死に、業を煮やした聖十字教会騎士団及び東の超大国、シラグラド帝国主導で聖十字連合軍が災厄の魔巣に進撃しました。災厄征討戦争の始まりでした」

ナルシヤンの言葉に颯は啞然とする。

「戦争の結果の前に、勇者の召還の話もしときましよう」

8年前から、勇者召還に適した土地、最強の勇者の召還法についてこの大陸で…いえ、世界で一番の蔵書数を誇る、アルテリア法国内央書院で探し、最後に土地を守る精霊に話をつけて、5年前、やっと、わが国の魔導院地下で召還魔法陣が完成、最強の勇者が生まれると言われる召還を片っ端からやりました。

しかし、魔導師の魂が抜かれる、正規兵100名がかりで取り押さえなければならなかった魔物が出る、挙げ句に成功しても試験に失敗するなど、犠牲や、さらに精霊への貢ぎや多大な召還の為に必要な生け贄かわりの物資を買うなど、浪費が続き、一年で2回、召還の儀式が出来れば良い方でした。

そして遂に、先ほど述べた通り、勇者が出来ない事に痺れを切らしたシラグラド帝国、聖十字教会は魔巢への総攻撃を決定、周辺国にも兵士抛出が命ぜられ、それに反対していたわが国も一応体裁の為、100の攻撃、治療魔導師、3000の正規兵を出しました。

5年前、敵の魔物、人形兵が太陽の光に弱い事から、太陽が年に一番長く出る日に、大公国に北の海岸除いて、東西南、約20万の聖十字連合軍は越境しました。

「……、結果は？」

「やはり聞きますか。……圧倒的大敗です」

颯はやはりと思う。

連合軍は槍、騎兵隊8万、騎士3万、聖騎士1万、鉄砲4万、斧2万、他は支援部隊、魔巢破壊の大砲兵団、魔術軍も引きつれての大大小小的な戦争も、最初は数で圧倒した連合軍だったが、徐々に犠牲は増え、災厄の正式参戦では各地で惨敗、開戦から約50日目の日の出ころ、遂に撤退した。前線の生き残りは僅かに数万、さらに、発狂者続出で連合軍は瓦解をしていた…。

こうして、征討戦争は幕を閉じ、さらに国民が不安で暴動が広がり、さらに昨年からは、災厄の魔物が周辺国に越境し始めたのを受け、早急に手を打たなければ手遅れになるとして、最強勇者召還の中で最も高次元で、危険ながら、絶対に神の力を授かる召還魔法陣の製作を決定しました。そして従来3年分の代償を払い、遂にあなたのお兄さんを召還したのです。

「ていうわけで、今に至るわけなんです。ちなみにこれに失敗したら大変なのです」

「ちゃんちゃん、という音が背後から聞こえるくらいにナルシヤンはあっさり言う。頭が痛くなってきた。

「それでは兄貴はマスコットではなく…」「時が来れば、最前線の人柱になって頂きます、まあその前に試練に失敗したら今度こそ人類存亡を賭けた一戦を起こしたがる馬鹿共が動き出すでしょう」

ナルシヤンはあっさりと言う。あっさり過ぎて逆に突っ込めなくなる。

「……、色々言いたい事はありますが、兄貴の受ける試練とは？」

「冷静に次の質問に移行するとは、やはりあなたは欲しい人材だ。と、睨まないで下さい、これです」

ナルシヤンは机の下から鉄の棒を取り出す、いや正確に先端部分数センチは真つ白である。それと、なぜ彼はハンカチでくるんで直接握らないんだ？

颯が不思議な表情していると

「これは聖十字教会が属性判定に使う棒です。握ってみて下さい」「握るだけでいいんですか？」

「はい」

ナルシヤンの言葉に従い、颯は少し逡巡したのち、思いつき握る  
刹那

ビク！！

「カハっ?!」

一気に体に流れていた何かが全て右手を介して棒に流れる感覚を受ける。

心臓の音は大きく聞こえて体を巡る血の感覚をやけに感じる。そして数時間にも感じて、実質数秒後、やっと何とも言えない体の異変がいきなり消える。しかし体の上半身の力が無くなり、棒を机に落としてしまう。

「……、これは一体…」

「おお、ソウ、あなたは聖具の使用が出来ます」

「せ…聖具？」

颯は体力を奪われて息が荒れる。体がふよふよと動いて、背筋が伸ばせない

「大丈夫ですか？」

サラさんが体を肩を持って体を支えて、右手で背中を撫でて落ち着かせようとする。

「ああ、もう大丈夫です。ありがとう、サラさん」

「これもメイドの務めですから気になさらず」

別の意味で心拍数が上がりそうになったので、早々に止めてもらう。ナルシヤンはニヤニヤしている。

「それで、聖具とは？」

「はいはい、それはですね、さっきも言いました聖騎士と呼ばれる兵士が身に付ける武器、防具で、聖十字教会から支給されるこの棒で属性と適性を判断します。聖騎士は通常より精神力が高い人で、装備すれば高い攻撃力、防御力を得られます」

「適性に漏れると…」

「この棒はすぐに手放せるので、死ぬ前に何とかかなりますが、本物の聖具は手放す前に死にます。しかし一旦力を聖具に馴染ませれば、一生その人の武具として、他の者は持つても絶対に持てません」

あっさり言う。凄いぞ、それ…そして颯は

「それで、俺の属性は？」

「この先端にある白い部分の色があなたの属性ですが…これは！見て下さい」

ナルシヤンに言われて、颯も覗くと、上が深緑、下が透いた緑だ

「ソウさん、あなたは大変珍しい、二重能力《ダブルアツ》の持ち主だ。あなたは上半身が物を砕き叩き斬る重力、足は風の属性よりさらに軽く俊敏で高く跳躍したり、落下の衝撃を風の盾で怪我なく降り立てる空です。2つとも風という基本属性の発展という、本当に珍しい種です！」

ナルシヤンが弾んだ声を出す。颯は理解に時間がかかる。

「それって…凄い事ですか？」

「凄いものにも…、この二重能力を持つ人間は騎士家系の僅かで、あなたのような属性は、本当にひとつまみの人材です！本当にあなたを獲得したくなりました。近衛師団とかに行かせません！」

ナルシヤンは目を輝かす。

「ソウさん！今すぐ聖具召還しましょう！」

「い…今すぐって…出きるのですか？」

「出来ませ…ああ、私は宰相である前に聖十字教会の神父です。公爵家出身ですが、家督は兄が受けるので、で、我が国は基本、王と議会が決めて、宰相は名ばかりになりやすいので、こうして私がナルシヤンは苦笑する。何か複雑さを感じる颯、

「とにかく、私はソウさんが聖騎士になって下されば、今後人類は少しでも有利になります。お願いします」

ナルシヤンは真剣になり、話す。

颯は考えたが、瞬間的に決まっていた。

俺は、そして馬鹿兄貴を連れて現実世界に戻る。その前に災厄を倒すが前提…自衛官だとか正義でなく、一個人として災厄を倒さないとかかしくりしない。

だから…

「分かりました。その役目、引き受けさせて下さい」

「おお！それでは早速…」

ナルシヤンは手早く折り畳まれた紙を開くと、びっしりと円陣の読めない文字で埋め尽くされている。円陣の横には縦長長方形の枠

「これは？」

「まだ聖騎士の召還を受けてない聖具を召還する魔法陣です。この魔法陣は小さいですが、発信側、聖具秘密倉庫には非常に大きく緻密な魔法陣があるそうです。まあ受信魔法陣は誰にでも書けますが、発信の魔法陣一から書ける人はほんの数人しか居ませんが。さて、まず属性判定した棒をこの枠に置きます」

ナルシヤンは長方形の枠に棒を置く。

「このペンで名前を、もちろん自分の居た世界の文字で」  
羽ペンが颯に渡される

颯は慣れないながらもなるべく綺麗に「瀬戸霧颯」と紙に書く。確認したナルシヤンは

「最後に、魔法陣の上に手を置いて下さい。そうすれば契約完了、自動的に衣が変わりますので、下着以外の服は消えますが、大丈夫でしょうか？」

ナルシヤンの言葉に颯は

「気に入っている服じゃないし問題はない、ああ、このネックレスは外します」

あの狭間の子から貰った奴は大事にするために外す、これが自腹で買った戦闘服なら泣いたがと心の中で付け加える

「そうですか、それではどうぞ」

「いきます！」

颯はためらいが出る前に一気に魔法陣の上に手を置く。

刹那、体が一気に吸い込まれる感覚がして、魔法陣は白い光を放ち、颯を包む。

数秒の後、脱力感から解放されて目を開くと

「中々様になつてますね」

「見立て通りだ！しかし騎士では珍しい形だな」

サラさんは微笑しながら言い、ナルシヤンは興奮している。颯は鏡を覗くと

「……………」

まず一言、痛い…精神的に

もうすぐ20になる男が着るのか？

まず胸部、肘、膝には白金のプロテクタ みたいなものがあり。足には淡い青の幾何学的模様のブーツ、メイルは銀色、そして頭には両側頭部に白金色の髪飾りが付いている。原理は知らないが密着しているが脱着は出来るみたいだ。

そして剣、これが意外だ。

「銀剣？」

そう、颯が持つのは輝きを放つ刃渡りが70センチある長い銀剣。しかし重力の属性がある割には全体的に細くて軽装だ。

「ナルシヤンさん、これ……!!」

振り返ったその瞬間、颯の頭に木刀のようなものが一閃、しかし、髪飾りの効果か木刀は寸でで止められる。犯人はもちろん

「何するんですか?!ナルシヤンさん!」

「済まない済まない!しかしこんな防具は初めて見たのでつい……と!!」

「っ?!」

ナルシヤンは今度は下から斜めに一閃を加えようとしたが、キンツ!!

今度は剣を太刀筋に構えた颯の銀剣が交錯して木刀が少し切断される。

「いい加減にして下さい!」

「本当に済まないな!しかしその剣と君、凄いな」

笑いながら構えを解いたナルシヤン、颯は警戒したが、やがて剣をおろす。冷静になると

「これからは止めて下さい、凄い……ということ?」

「まあ不意打ちはさすがに済まん、それで、うん、君の剣はやはり風を常時纏っているから、この木刀、本来なら刀を普通に弾くのに、少し切れた、これは本当に凄い事なんだ。それと……この木を斬ってみて」

ナルシヤンが用意したのは両端でしっかり固定されてる横倒しの木刀より大きめの丸太。

「これは風など、斬る能力を向上させた剣でも両断が難しい特殊な木です、さあ一思いにざっくりと!!」

「いや、今の説明聞いてこの剣で出来るのか?!」

「物は試しです!!」

ナルシヤンの勢いに負け、

「ふうっ……」

颯は精神を集中させてから

「せいっ！」

がッ！！

銀剣は少しめり込むが、進展は無いと思われたが、颯が踏み込むとバキヤッ！！

丸太が両断されずに折れる。サラさんが拍手する。

「やはりね」

「分かってたんですか？」

底意地悪い笑みを浮かべるナルシヤンに颯はもう慣れた感じという。「この銀剣には風で威力を一点に収束して、重力で一気に圧力を加え、属性関係なくいかなるものも砕く。ある意味万能で非常に高い攻撃力を誇ります」

「そうなのか」

颯は銀剣を眺めて呟く。そしてはたと気付く

「そういえば、兄貴はどんな装備になるんだ？」

「言い忘れていました。お兄さんは、成功すれば、通常の聖具の5000倍の聖具を身に付けます。こるはぶっつけ本番なので、と言っても、来た」

ナルシヤンの部屋に文官が入り耳打ちする、神からチ トを授かったから大丈夫だろ。颯は確信する。

「さて、お兄さんは成功したそうです。さて聖騎士にもなってもらいましたし、ソウさん、一つ仕事を頼めますか？」

ほら来た、いきなりの任務。まあ上から命令されるのは自衛隊時代から一緒だし、気にしない。

「何をすれば？」

「素直で良いことです。それでは単刀直入に、領主宜しく！」

「……………はっ？」

颯は何も考えられない。なんだそれ？

「詳細を詳しく頼みます」

「うん、元から決まっていたけど、勇者には一つの文官貴族と二つの騎士貴族を保有する西の土地、ライトフィナル侯爵領を勇者の特殊財源にする予定で、本来は自分が行く予定でしたが、弟さんが来てくれたので、名ばかり宰相でも最新の情報が貰えるこの場所が好きなので、どうしても侯爵領には行きたくなくなっただんですよ」ナルシヤンは笑いながらサムズアップで言う。

「……………」

何かもう、遠い目をする颯。反撃の意を込めて

「いやいや！絶対自分なんて領主したって…信用されますか？」

「ソウさん、身のこなしが一般人ではなかったですよ、多分軍出身ですね？」

颯は言葉が詰まる。ナルシヤンの真剣モトは無駄に緊張感が走る。

「まあ、平和という緊張感とスリル満点の情勢の軍隊といえない武装集団に居ましたが」

「へえ、それじゃ尚更…いいですよね？」「もちろんです！」

ん？聞いた事の無い女性の声、振り返ると、白い甲冑の女性と、なぜスコットが？！「お初お目にかかります！私、ライトフィナル侯爵領配下、セルドリック家筆頭騎士、スフィア・セルドリックです！勇者弟様を抜きにして、聖騎士の能力に惚れました。是非わが領統治に！」

「拉致られてきましたが、改めて、セルドリック家平民選抜騎士、スコット・ラット・ラルトです！スフィア様の命で同行します」

「ライトフィナル侯爵領配下、ハリー家筆頭騎士、ソニック・シエル・ハリー。勇者様親族守れるなら歓迎します」

白い甲冑を身にまとい、非常に顔立ち整ったスフィア、普通の鉄の甲冑のスコット、黒に統一してクル顔で長身のソニックが一斉に跪く。

「ああ、それと、サラさんは治癒魔術が使えるので、おつきにどうぞ」

「宰相ナルシャン様のメイドにして、これからはソウ様メイド予定、サラ・メルシャン、同行出来ましたら嬉しいですよ」  
微笑みながら跪く。

「で？答えは？」

ナルシャンはニヤニヤしながら聞く。

完全に包囲網を敷かれた颯は、

「分かりました！やりましょう！」

「よしっ！！」

颯の言葉で周りは沸く。

ああ、これからが大変だ…。

颯は目を細めて天を仰いだ。

## 旅立ち

迷路のような城内を歩くのは、颯と颯に忠誠を誓った騎士達。

サラさんは勇者召還、つまり今日の夕刻までは王宮のメイドという契約だったそうなので、あとで合流する。

「本当によろしいのですか？」

スフィアが心配そうな口調で問う

「ああ、スフィアさん達は明日のセレモニーを見せずにさっさと出発するのが逆に申し訳ない」

颯は申し訳ないという感じで言う。

明日には待ちに待った試練に耐えて晴れて勇者になった兄、稔の第1回の凱旋が王都で行われる。

第1回なのは、稔はまず翌日に王都民だけに顔出しして、剣術指南を受けた1ヶ月後に、各地で実戦修行と精霊との交渉への出陣式が第2回パレード、これが本番だ。

いきなりの布告でも、商魂逞しい商人は明日も、1ヶ月後並みに重要な戦いと定め、いかに早く、品質の高い製品を取り寄せ売れるか、これで凱旋が成功して、盛り立てに貢献した商人には、爵位を頂き貴族に成り上がり、または王室、他国にパイプある人のお抱えになれば、どれにしても万々歳だ。

どちらにする貴族がこれを機にドレスなど新調するはずだから商人にとってバブルだな

王都市民も仕事を止めて、今は凱旋の準備だ。

「いいえ、領主の長期空位はひいてライトフィナル衰退に繋がります。むしろ我々は歓迎が総意です」

ソニックは冷静に言う

「ありがとう、ソニックさん」

「あの〜ソウ様…」

「何ですか？スフィアさん、あと、様付けされる程ではありませんので、止めてくれませんか？」

「いえ、むしろ私達にさん付けしないで下さい！」「」

「ええっ?!」

スコット除いた2人にツッコまれる。

「いやいや、基本的にスコットは平民騎士だから気兼ねは基本無理やり無くせるけど、あなた方は無理です！」

「領主様であり聖騎士なのですから、もっとどっかりとして下さい！」

「そうです！ソウ様！」

今度はスコット参戦！しかしな

「兄貴が爵位を持ち、俺は代理執行人で爵位無し、対してスフィアさんはセルドリック家騎士伯爵の跡継ぎでソニックさんもハリー家騎士子爵跡継ぎ、絶対的にそちらが上だと思うが…」

いや、ナルシヤンから聞いた時は、凄い大物に驚いたさ！

「関係ありません！」

「ないの?!」

颯は驚愕する。スフィアは溜め息を吐き

「いいですか？ソウ様がライトフィナル領統治は決まった事です。代理やら爵位無しやら関係ありません。私達はあなた様の手となり足となり、戦陣を駆け抜ける名誉を賭けた矛として、領内荒らす不届き者から誇りをかけて守り抜く盾となる。それが我ら騎士貴族の信条であり絶対の理念なのです！なので私達を信頼して、遠慮無くお申し付け下さい！」

スフィアは言い切り、颯はおののきながらも考えを改める。

彼らは自分に掛け値無しで信頼と忠誠を誓っている。ならばそれを踏みにじった自分がいけないのではないか…

颯は考えを直してから

「俺は自分卑下して、あなた方のそこまでの忠誠を踏みにじってしまいました、済みません」

一瞬騎士達はポカンとしてから、ふつと我に返り

「いえいえいえ！別に踏みにじられたとかそんなのじゃなくて、領主の心がけとか何とかとか、えつとえつと……」

スフィアがあたふたして、ソニックとスコットは何を言おうか思案している。

颯は慌てて

「いやいや、そこまで深く考えなくていいから！そして俺から申したい事があるんだが」

颯の言葉に3人は慌てるのを止め休めの姿勢でこちらを向く。少し怖い……

「何でしょうソウ様」

代表してソニックが聞く。颯は

「俺の呼び方に関してはまだ好きにしている。呼び方は望み通り呼び捨てにする。しかし、俺は異世界出身で、この世界の政治、聖騎士でも剣術はあなた方以下だ。そこでだ、俺はこれから赴任する地の領民、貴族、そして特にあなた方3人に全幅の信頼を寄せる。そして外では護衛や階級差を出しても、中では対等に、剣術を教えたがり切磋琢磨する仲間として、いや、俺を弟子みたいに扱ってほしい。頼めるか？」

3人は顔を見合わせて、そして

ジャツ！

3人ほぼ同時に左胸に右拳で叩いて笑顔を浮かべる。心臓を捧げる忠誠と親愛の意思。

颯も真似て左胸を叩く。周りに居た人もこの雰囲気にとんとんと

「おお！こんな所にいらつしゃいましたか！」

おや？かなりいい雰囲気を瞬時にぶち壊して下さりやがりましたこの声はだ〜れかなっ？

振り返ってみると

「どちらさまでしょうか？」

笑顔で聞いてみる。相手は

「冗談がきついですな〜ソウ殿、私ですよ、ゲルマです」

まさかの召還の場で颯をこけにした、魔導なんちゃらのゲルマだ。もちろん名前なんて忘れるはずがない、役職は0コンマ1秒で忘れたが。しかし素直に言わず

「ああ！忘れてました！済みません」

完全棒読み、忘れてないけど敢えて言う。さっきの仕返しだ

「はは、後戯れを…」

あつ、少し切れかけてる？と颯が思ってた瞬間

「あの〜ゲルマ様、何か御用でしょうか？」

スコットが果敢にも聞いてくる。

「ん？平民騎士の貴様には関係ない話だ。私はこの聖騎士様に用があるんだ！」

ゲルマの言葉に颯の背筋が凍る、聖騎士様…だと？なんだこいつ？俺の忠告無視か？颯が苛立ち始めた時

「我が領主様に何か用か？」

「ん？きさあなたは？！閃光<sup>ブリッツ</sup>」

ソニックが前に出ると、混乱するゲルマ、いや貴様からよく強制変更できたね。てかブリッツ？

「り…領主とは？」

「聞いてないのか？宰相閣下の代わりに、直々に勇者弟様が我がライトフィナル領の統治をするよ」と

「なつ…そんな話聞いてないぞ！真偽を確かめなけれ…」

「おやめ下さいゲルマ殿、これは決定事項です」

「なんで、白き愛国者《ヴァイス・パトリオト》が?!」

進路を塞ぐのは、颯もゾクリとするくらい、碧眼からすっぽり感情が抜け落ちたスフィア。さっきまでコロコロ表情変えてた彼女とは思えない。

「それより、国王の審議を通さず、け…決定事項とは言えない！」

お お、ゲルマさんびびっとるびびっとる。

「決定事項も何も、我々グラ ション・セルドリック騎士伯爵が一人にして筆頭騎士、スフィア・セルドリックの名と命と名誉をかけて領国にお送りします。それ以外での異論は一切認めません」

スフィアは言い切る。ゲルマは冷や汗をかきながら

「あ…ああ、分かった。国王には伝えよう」

ゲルマは踵を返して来た道に戻ろうとする。颯は最後に

「強くなってからまた会いましょう。首洗って待ってる」と呟くと

「ひい！失礼する！」

ゲルマは立ち去る。颯はスコットに

「なあ、ソニックとスフィアって…」

「ソニック様は閃光ブリッツと呼ばれる速攻騎士で、スフィア様は白き愛国者『ヴァイス・パトリオト』と呼ばれる、大剣使いで、元から広い侯爵領をまとめるには2つの騎士貴族には難しいのを、まさに少数精鋭、一騎当千の騎士を育て、お二方の中でも大陸の中でも上位の騎士です。勇者様の従者未満国内騎士以上です」

……、チートだ…これ確実にチートだ…。

「なにか喋りましたか？」

感情が戻ったスフィアが聞く。

「いや、単にあなた方が凄いということに驚愕しているだけです」

「ふふっ、お褒め頂きありがとうございます」

…うん、こりゃ本当に大物だ…

颯は今日何度目か分からない遠い目をした…。

時は過ぎ、月が昇り、現世じゃ有り得ないくらいの星空の下、彼は居た。

颯を道連れに、異世界ダイブした張本人、瀬戸霧稔。

ここは城の最上階のテラス、今は誰も居ない。まあ秋か冬に近い寒さの中出るのも中々無い

「ふうっ」

白い息を吐く稔。彼の装備は、聖具の中で最高峰、伝説の武器「約束された勝利の剣〈エクスカリバ〉」だ。

見たとおり、剣は常人には見えず、見えても、輝きで形が分からない。簡単に言えばセイバだ。これで分かったら凄いなと思う。

パ ティ は大陸中からの選りすぐり、色んな意味でハイレベルな人達ばかりだった。いやもう…

「二次元万歳！！！」

稔は紳士モ ドで溜まっていた決まり文句を叫ぶ。

いや現世には未練が無いと言えば嘘になるけど、髪の色、目の色が多彩で、液晶の向こう側で微笑んでた彼女たちが触れられて、しかも勇者待遇で既に3人の女の子と急接近中なんだよ？！

さ〜てフラグが多いぞ。どうしようか…

どう愛でるか考えていると同時に、引っかかる事もある。

弟の颯だ。

いくら何でも異世界に巻き込んだのはさすがにまずかった。

更にあいつは、俺の代わりに領国を統治する事になっている。何故かガタブルしてたゲルマから聞いた。

颯は諦めたように遠い目をして受け入れていたが、本当はどんな思っていたのだろうか……

「ああああああ！！！！気になるうう！！！」

「夜にうるさいぞ、兄貴！」

稔はテラスから叫んでいたら、後ろから馴染みのある声。振り返ると、髪飾り以外の防具を外して、軽装になった颯の姿。剣はちゃんと帯刀している。

「ああ、颯か…」

「準備が済んで外の空気を吸おうと思ったら、兄貴が叫んで、少し引いた」

引いたって…まあ完全に本性晒して未だ付いてこれる人間は、弟と行きつけゲーム屋の同士くらいだ。

「明日にでも行くのか？」

「ああ、明朝に出発すれば兄貴のパレードの後に跋扈するであろう商人達で自分たちの行く道を使って大挙して押し寄せて逆流するのが難しくなる前にね…、あとは魔導なんちゃらのゲルマに宣戦布告というなの脅ししちやっただから尚更」

颯は苦笑する。稔もつられて苦笑する。商人に身に覚えがありすぎる…。

召還されて僅か10時間で、王都はもちろん近くの貴族なら早馬や連絡用鷹で連絡が回り、お返しはたくさんのお貢ぎ物。勇者を抱き込むのは非常に有益なんだから…。

中身は宝石、高級な薬、シルクがふんだんに使用された服など…

同時に色落としやら騎士貴族からは勇者の血が欲しいと、下はこの世界で大人と認められたばかりの15歳、上は一つ年上の貴族の家の奥さんまで…合計5人程贈られてきたが、震えてたり他に好きな人が居る彼女たちを襲うなんてのは普通に出来ません。

そういう性は互いに愛あつての行動で俺はそれ以外の女性は愛でる対象でしかない！

どちらにしる変態というツツコミはなしの方向で。

まあ、今はご飯食べさせた後、別の部屋で寝かせて、明日返す予定だ。ちなみに失敗した彼女たちに酷い仕打ちした場合いかによってはそれ相応の制裁が待っていると言っておく。

「兄貴？兄貴！」

「ん？あ、ああ済まない。どした？」

「いやさ、兄貴が遠い目してたから一応な」

颯は言う。

弟、性格は変わってないが、随分目つきが鋭くなったな…、時々昔のように柔らかくなるが。

それより…

「なあ、颯」

「なんだ？」

石で出来たテラスに背もたれる颯が聞き返す。

「いやさ、今更だが…巻き込んで済まなかったてね」

「……ククツ、本当に今更だな兄貴」

笑いながら言う、清々しい顔で言う。

「いや、確かに最初は戸惑って、これからも戸惑うと思うが、幸い  
凄…本当に凄い人達が周りに居るから、何とかなる…と思う。そ  
つちこそどうなんだ？」

颯が聞いてくる。

「まあ個性豊か、精鋭であるのは間違いないけど、そして二次元万  
歳」

稔は苦笑しながら即答、本当に個性豊かなんだよ！でもその感じで  
美少女が居るからやっぱりいいんだよ。

颯は顔を引きつらせて

「兄貴…良く現世でまともに生活してたね…」

「まあいつでも引きこもり準備は出来てたぞ」

稔の本心からの言葉に颯は啞然としてから

「……、こんな兄ですけども、頼みます」

「良く気づいたね、あなた」

「はっ？」

颯がニヤリとして、稔は振り返ると

「スノーザ?!」

精悍とも言える顔立ちで燃えるような長い赤髪に赤い防具、騎士と  
思えない軽装備でも、強襲アサルトという二つ名を持つ、稔のパティで  
最年長の女性騎士、スノーザ・レクティクルである。会った時から  
何かとイジられている…。

「ちよっ、おまつ!」

「安心しなミノル、誰にも性癖と売女に手を出さなかったヘタレと

は言わないよ」

「ちよおお？！」

「売女？」

ヤバい？！颯はこの手に関しては非常に怖い！

普段は自衛官だけど正義があるわけじゃないとか言っているけど、  
こうバリバリに反応するんだからやっぱり勸善懲悪タイプじゃんか！  
スノーザに恨み目向けると

「言葉のアヤよ、まあ商人、貴族は思惑に外れて悔しがってるけど  
ね」

スノーザは状況を楽しむようにしれつと言っ。

「手え出してないよな？」

颯が怖い。稔は

「そんなわけは無い！ちゃんと保護して、明日送り主に脅しに行く  
計画だよ！」

「本当だな？」

「本当だよ！なっ！スノーザ！」

「静かにしないと迷惑だぞっ」

すかさず無駄と分かってても稔は助けを求めたが、スノーザは人差し  
指を口の前に立てて、ウインク。悔しいが滅茶苦茶様になってて可  
愛いじゃねえか　！！

「ハア……」

颯は溜め息をつく。多分萌えを構わず楽しんでる自分に対しての  
溜め息だと思っが、否！ここで萌えられずにどこで萌えようか！！  
スノーザは颯に近づき

「へえ、あなたが弟さん？」

「はい、ソウ・セトギリです。まあこの度ライトフィナルまで行  
きます」

「良く私がミノルの従者と分かったねっ」

「たまたまです」

「たまたまねっ」

「……………」  
「……………」  
なんだ？あの2人の沈黙？

「ふくん、さすがは聖騎士になれた方ね、覚悟が見えていいわ」

「ありがとうございます」

スノーザが人を褒めるだと…?!

くそ…早くあの姉妹のフワフワ成分を摂取せねば…!

稔がパーティーに居る、年齢に割り口り成分が高いり　ネ姉妹を妄想して成分を精製していると

「兄貴！」

「ん？」

稔が妄想を止めると、颯は

「それじゃ、俺は明日が早いから、しばらくは会えないな…」

「まあな」

ここですばらくのお別れだ。颯なら、あいつなら人心掌握が上手いだろう。何てたって日本史の観点から現在政治税制の論文を書いた猛者なのだから、それ以外は、あの少年工科大学に良く入れたなレベルなんだがな…。

颯はテラスから中に入る前に

「最後に独り言、俺はこの世界に留まるつもりは無い、だから災厄や任される所領を守りながら世界を脱する方法を探す。見つけたら兄貴にも一応伝える。この世界に残ってもその選択肢は任せるけど……どの世界でも老衰以外の死は認めないからな！」

何も聞かずに立ち去る。いや、後ろ姿から滅茶苦茶気恥ずかしく思ってるのが丸分かりだから！スノーザも笑いをこらえるのに必死だ。そして颯が立ち去って数分後にやっと収まったスノーザが

「ふふつ、随分と理想論が好きな騎士さんね。でも…いい弟ね」

「まあな、あいつは生ける白樺派だ」

「白樺派？」

「人間の良い部分重視を描く作家、その中のキャラみたいだ」

「ああ、でもあの弟さん、多分予想だけど、作戦が半端なさそう…」

「ああ…」

スノーザの言葉に稔は頷く。

さて、あいつはどんな政治するのかな、そして

「俺に言ったんだから、颯、お前も老衰以外では認めないぞ」

小声で呟くと、スノーザは稔の方を向き

「何か言った？」

「いんやなにも、さて、明日の為にもう戻るか」

「はいよ、ミノル」

稔も歩き出す。勇者として、1人の災厄から人類を守る兵士として

……

一晩がたち、朝を迎える。

前日が良く晴れていて、今日も雲一つない快晴、王都大通りはパレードの為に、観客とパレードの境目にロープを張り、既に席取りしている人がロープを越えないように、一個大隊、約600名の兵士が警戒している。パレード本番では二倍の連隊1200名まで増員する予定だ。

そんな大通りの左右にある準大通り《レリンクスヴィーツ》の道端にあるパレード商戦の為に早朝から開いている飲食店に居るのは

「はいよ、サベルレピアの朝食の代名詞、ニッケルだよ！特盛りを頼んだ男性は特別に大盛料金でいいよ！」

「……ありがとうございます！」

恰幅のある優しそうな女将さんが、慣れた手つきでニッケルという日本でいう混ぜ込みご飯みたいなものが配膳される。

颯とソニックは特盛り、スコット、スフィアは大盛を頼んで、サラは普通盛りだ。

「いただきます」

食べてみると、少し硬めの混ぜ込みご飯で、味は少し薄いですが、美味

しい事にならない。

平民の店で食べるのには颯やスコットはいいとしてもソニックやスフィアが嫌うかもと少し躊躇ったが、常駐戦陣を叩き込まれた2人は美味しければ、最低食べれば良いということで躊躇なく現に皆、美味しそうになおかつ軍人特有の早食いでもどんどん飯が消えていく。「美味しいです女将さん！」

「嬉しい事言ってくれるねえ！でも残念だね〜せつかくの勇者様誕生のパレードが見れないなんて〜」

ニツクル注文の時に一緒に頼んだ保存に適した塩漬け肉や干し魚を手際良く詰めながら女将さんは言う。

「まあ、領地から早く帰って来いと言われているので颯が言う。」

「そうなの？と、思ったけど、あなた方騎士さんよね？平民騎士にしては派手な甲冑だし…青髪のお姉さんなんて魔術師みたいよ」

女将さんの言う通り、サラは馬に乗れる軽装ながらも、しっかり魔術師のローブを羽織っている。すると

「我が騎士貴族の上様が平民騎士に面白い格好をと、普段なら着れないような派手な格好させるのです」

にこやかにさらりと嘘を言うスフィア。

彼女は名前と二つ名は大衆に良く知られているため、バレるとファンが殺到するため、これに関してはさらりと嘘が言えるようになってきたらしいが…さらりすぎだ、バレないか心配したら

「ああ〜地方ならありそうね」

「はい、まさしく地方です」

女将さんは疑いなく信じてくれる。随分とまあ…そんなこんなで

「ご馳走様でした」

「早いね！」

「元から早食いの習性と、美味しさでさらに早くなりました」

「嬉しい事言っちゃって〜、それじゃ保存食もまけて、1200レ

ピスから1000レピスにしちゃうわね」

「ありがとうございます！」

颯の純粋な言葉で大分まけてもらった。

ちなみにこの国はレピスという通貨が使われていて、

真鍮製の硬貨が1レピス

銅貨が10レピス

純銅貨が100レピス

銀貨が1000レピス

純銀貨が1万レピス

銀貨まではこの大陸では簡単に大量に見つかっているため、価値は低く、金からは跳ね上がって

金貨5万レピス

大判金貨10万レピス

そして貴族クラスしか持てない1000万レピス相当のグラル貨  
国家級取引の10億レピス相当のスパグラル貨が最高である。

国民平均月収は純銀貨2枚の2万レピスである。しかし、それは例  
を挙げると家族4人の生活ではギリギリで、労働環境と給料制度が  
整っていない。

ソニックが支払い、女将さんの激励を聞きながら、次は人口100  
万の王都の西門まで歩いていく。

王都内は基本的に高い道路使用料を払い、役人証明が無いと、馬車  
などは走らせてはならない。名目は馬の糞尿放置問題解決の為、真  
の理由は税込確保。

スフィア達も例外でない為、西門壁の外にある私営の馬の待機所が  
経営されている。そこに愛馬を泊めてるらしい…が

「スフィア、俺とサラの馬は？てか初心者に乗れるのか？」

「大丈夫です、既に手配して購入予定です。そして、ソウ様、慣れ

です！慣れれば何でも出来ます！」

「慣れなの?!」

「あ、私も馬は持ちませんが、一応馬術は出来ます」

「ええっ?!」

アドバイスの仕方に驚愕して、さらにサラが馬術出来るのに凄く驚愕して初心者は颯だけに頭を抱えなくなった…。

「ああ、それとスコット」

「何でしょう、スフィア様」

まだ人が少ないレリンクヴィーツでスフィアの後ろに従者のように付いて来るスコットを横につかせ

「ライトフィナ ル時代から王城時代まで相棒だったあなたの馬は高齢になったから、あなたの馬も新調したから、愛馬は王城の行事馬として今後活躍しますので」

「……本当ですか？」

「ええ」

スコットは即座に王城の馬小屋に居る愛馬の方角に向かい左胸を拳で叩き、そして前を向いて新しい馬の名前を考える。

新調するなら新しい方に全力を傾ける。

理に適っているが中々薄情に見えるのは戦争知らない日本人だからかな？

王都は西が一番出るのが早いので、王城から約1時間程歩くととうとう王都外壁の関所を通貨する。壁の外は

「……、綺麗だな……」

「ええ、王都外の道は凄いです」

さっきまで超人口過密だったのに、無骨な石で積み立てた外壁の外は、真っ直ぐな道以外森が両脇に鬱蒼と茂っている。

道は小石を敷き詰め整地して、斬った岩を敷き詰める。ローマ帝国の道路よりも良さそうだな…。

「こっちです！ソウ様」

スフィアに呼ばれて行くと、かなりでかい馬小屋、その小屋の前に「連絡通りですね」

「ああ、ヴァイスとシュバルツは？」

「元気ですよ、本当に大人しくて扱いやすい、来なさい！」

受付が呼ぶと、調教師が五頭の馬を連れてくる。

スフィアのは白い甲冑に合う、真っ白い馬、ソニックは対照で真っ黒。

この世界はドイツ語重視の二つ名とか多いが、まさかのそのまま白と黒とは…

颯がどうでもいいこと考え、苦笑していると、

「これがスコット様の馬、速さ重視の軍用馬で10万レピス、サラ・メルシャン様は荒れ地、獣道、峠でも馬主を落とさないバランス重視の早馬種で8万レピス、そしてソウ・セトギリ様は、大人しくても戦陣では果敢な軍用馬種でも最高級なので20万レピスです、どれも持久力は高いです」

ソウは自分を乗せる馬を見る、白がかつていて、目は大人しくてしかし脚や腹の筋肉は見ていて引き締まっているのが良く分かる。

近づいてみると、相手も近づき、撫でるとグルルと言いながら馬も擦りついてくる。

「おおっ！」

感動のあまり、颯は思わず声を出し、他全員はその風景に微笑していた。

そこに領収書を持った馬小屋社員がスフィアのもとに来て

「それでは会計をしたいのですが…」

「済みません、それでは、スコットの馬はセルドリック家のサラ、ソウ様はライトフィナルの中央金庫から捻出でお願いします」

「分かりました、ではここにサインと、通貨早馬便の使用手数料を…」

「分かりました」

スフィアは慣れた手つきで書き始める。

この国は、国土が広い為、国内では貴族や商人、金の有る平民は、各領にある中央金庫、いわゆる銀行のような者があり、毎月、定期的に早馬が使用出来る店から通貨早馬使用の依頼証を貰い、各領地に早馬で金庫から指定された分のお金が納入したら帰ってくる。クレジットカードシステムに似ている。

ちなみに十分な金が無いと、高利貸しが立て替えて、後が怖いペナルティがある。とソニックから教えてもらった。

あと、通りで歩いてた時に聞いたが、彼ら私営馬小屋衆の大半の社員は元王都、王城守備に関わってた軍人が多いので

「まあ名門ライトファイナル領だからこんな高額注文出来るのですからね。最近赤字のくせに高額注文してきやがって…」

「……大変だな」

「それだけ?!」

「どうしろと」

社員の愚痴を聞きながら、どう反応すればいいか困るソニック。

「やつ!元気?」

「これから毎日高位騎士に囲まれて胃に穴が開きそうだよ!」

「安心しろ、もし俺が早馬郵便でお前が遺体で転がってたら合掌だけはしてやる。とりあえずな〜む〜」

「確定事項?!」

同期と思われる人にかからかわれるスコット。

「サラさん!付き合っして下さい!あなたに対する想いは計算に表せない!!!」

「ごめんなさい、あなたにはもつと素敵な人が居ますよ」

「おおぅ!!!」

「あゝあ、48度目の玉砕で激励だ(笑)」

会計と思われる人が、サラにアタックする。てか良く48回したな

！そして無視しないでしかも慰める彼女も律儀過ぎる…。

「はいはい！お話は終了ですよ！では、私たちは領に帰ります」  
委員長キャラを發揮するスフィアがまとめる。各々は馬に乗る。颯も何とか馬に乗るが、馬の方が気を遣って少し屈んでくれたので、早く馬に信頼される馬主にならねばと決意を堅くする颯だった。  
「優良貴族様ならいつでも歓迎です。またの御利用お待ちしております」

代表の1人が礼をすると、続いて外に居る社員全員が礼をする。

少し気恥ずかしいが、貴族騎士の2人は慣れた感じで会釈すると、  
「行くぞ」

と言い、馬の腹を蹴って動かす。

颯はさすがに腹に蹴り入れるのには戸惑い、とりあえず

「それじゃ、頼むぞ、行け！」

撫でながら命じて見ると、馬はブルルと唸ってから歩き出す。

周りの馬に精通している皆さんは、まさかの光景に啞然としていた。  
スフィアの横に付くと

「ソウ様…あなたは馬と喋れるのですか？」

「うん、分かん。あと、こいつの名前はパルトナ にしたから」

「相棒…ですか。いいですね」

颯の名付けにソニックが賛同する。

「それでは、予定よりも早く出発出来たので、ソウ様の基礎戦闘力向上と馬術向上のため、行程3週間、少し厳しいコースでよろしいですか？」

スフィアが聞く。颯は

「もちろん、指導願います。さてこの旅の始まりだ！」

颯が高らかに宣言すると、全員、左胸を叩いた。

## 初実戦

ライトフィナル領に向かう騎士一行、乗馬初めての颯が筆頭に、左右にはスフィアとソニック、後ろにはサラを守るためスコットが居た。

これからの行程は、正規の通称左廻りルートでなくある程度早く目的地に着く代わりに、魔物と厳しい道が多めな右廻りルートを使う。直進ルートという名の裏道は、文字通り、非常に早いルートだが、険しい峠越えが多く。軍隊の奇襲戦法でもリスクが高いと使用しない道らしい。

中間点の渓谷に橋を架ければ即解決らしいが、左右廻りルートの領主から、宿場街が廃れるからやめてくれと言われているらしい。とりあえず、颯一行は、1日目は慣らしてクレア連山手前の宿場街で一泊、翌日からはクレア連山の7つの山を3日で突破する。ちなみに普通なら2日らしい。

旅を始めて一時間周りも驚く程の早さで平地での馬慣れがした颯は、国内について聞いてきたが、ライトフィナルについて聞いてなかったので聞いてみる。

「なあ、聞きたいが、何でライトフィナルは領主不在なんだ？」

「え」と、簡単簡潔に申しますと、駆け落ちです」

「……………は？」

颯は間の抜けた声をだす。駆け落ち？スフィアは続ける

「なんと言いましょうか、前の領主は文武で有能な方でしたが、早々に両親を失い、親族も征討戦争参戦派で喧嘩別れの散り散りに、我ら騎士、文官貴族が精一杯に精神支援をしましたが…駄目でした。政治はしますが、心ここにあらずというか…」

「それで、誰と駆け落ちしたんだ？」

「ええと…ねえ？」

「そんな目で見ないでくれ…」

スフィアがソニックを見るといふか睨み、彼はため息を吐く。スコットは事情を知ってるか苦笑いでサラは颯と同じく、首を傾げる。

「まあ、その、駆け落ちの相手は私の妹です」

「ん？」

「一年前から不眠症になり、女性を近くに抱き枕にすると効果あると聞いて、婦女はまずいし、文官貴族には女性が居なかつたので、独断で男性より修行が好きなのを送り込んでみて……意外と元領主は元気だったようで……さらに妹は元から子供時代から元領主に心寄せたので……」

ソニックが苦虫噛み潰した表情になる。

ん……

「騎士と統治貴族、特に同じ領内の貴族同士の結婚は禁止されています」

スフィアの言葉が続く。

「それで？」

「7ヶ月前に、2人で居なくなりました。その時、貯めてた自己資産の2割を持って、残りは謝罪費で今も金庫にあります。次期領主もない我が領はそのまま王国命令で勇者召還の際に宰相が送られる予定で今に至ります」

……、とりあえず

「ご愁傷様です」

颯は言い、彼らは苦笑いするばかりだった。

「それで、ライトフィナルはどんな名産品があるんだ？」

「あ、無いに等しいです」

「んい?!」

スコットの言葉に衝撃が隠せない

「いえ、騎士の精強さは自分が勤めてた王城のみならず大陸内で有名ですが、他の大理石や農産物、建築木材は確かに誇れますが、国内で見れば大量生産地が他にあり微妙なので……名産品と言えなくて……人口も20万も居て、地方都市では珍しく借財ない領なのに、

地方すぎるのと、領が広くて中央市以外は人が散り散りで、有る意味目立たない小国……」

「マスケット銃の生産全盛期はもつと有名でしたよね？」

「……ああ、ありましたね」「」

サラの言葉で騎士の皆が声を揃える

「マスケット銃か……今はどうなんだ？」

「30年くらい前までは大陸全土でまだ需要があったり、改良型を用意出来ましたが、戦力拡充と鉄砲重視で騎士衰退を恐れて改良禁止になりましたし、150年の技術ですし、既に陳腐化しています」

「150年も……」

颯にツッコみスキルがあるならどんなに良かったか、だがそんなものは皆無に等しい！

「なあ、マスケット銃作れる職人ってまだ居るのか？」

「？、あ、はいまだ銃は少数でも注文はありますし、最近は何だか有名な数学者がマスケット銃職人と会合を重ねてますよ」

「そうなのか……うん、これでライトファイナルについて少し分かった。ありがとう」

颯は礼を述べてから考える。数学者と銃職人……か、何だかチャンス  
の匂い……

あとは他愛の無い話か無言で終始

宿場街までの道のりは整地された道路で、道中は王都勇者商戦に急ぐ商人と数組すれ違った。

そのままゆっくりと昼もしっかり休んで、3つの街と村を通り過ぎ、8時間くらい馬に乗ったか、少しずつ馬に慣れてきたころ

「着きました。クレア領、宿場街ダレスです」

馬を預け、ダレスに下る  
賑わっている街、小さくもないが大きくもない、しかし活気なら王都に負けない。

しかし今日はお祭りなのか出店もある。

そして颯は至る所にある旗を見て、理由が分かった。ちなみに、神は言葉だけでなく、文字も理解出来るように組み込んでくれた

「勇者記念祭り…兄貴も随分持ち上げられてるな…」

「多分王国の精鋭騎兵の早馬や、統治貴族通信用鷹が四方八方で号外を流してますから、聞いた街はこんな祭りを普通にしますよ、帝国でも伝わればパレードはするでしょう」

「へ、へえ〜」

本当に勇者が欲しかったんですね…。

「さて、宿を探しますよ。右廻りルートならまだこの時間帯なら空きも多いでしょう」

スフィアの言葉は30分後に容易く打ち砕かれるとは思ってもよらなかった…。

30分後…

「………」

「少し大変な事態になりましたね…」

皆沈黙してる中、サラはいつも通り平常心でいる。

宿が全部予約が取られていたのだ…

「しかし、偵察の早馬に予約を取らせるとは…」

「感心してる場合じゃないわソニック」

「うむ」

本当に商魂逞しい商人、勇者に会いたがる貴族はこのルートに集中して、先遣の早馬の人が死ぬ気で予約競争を昼過ぎから行われてたそうだ。

予約に間に合わなかった人は、主人に折檻され拳げ句放棄されるという可哀想ぐあい。

間に合わなかった者達は危険覚悟の夜中の道中突破か、ダレス周辺でキャンプをしている。兵士の数が宿場街の人口とほぼ同等になり、ある意味安全で、ある意味危険な状態だ。

「とりあえずソウ様だけでも…」

「いや、スフィアさん、気持ちはあるが、俺はサバイバルは慣れてる差別するつもりはここはサラさんを優先した方が…」

「申し訳ありませんが却下です。主君を優先せず従者優先はありえませんが、サラは二番目にします」

「そうですソウ様、私はあなた様のメイドです。主君優先をお忘れなきよう」

「うっ…済まん…」

「鈍感…」

少しムツとした声で言う女性陣に謝る颯。

男性陣は合掌する。

「でも、早く探さなければいよいよ暗中模索の野営作りになる暗さです」

日が短いので、暗さが増していく。この世界に街灯なんて無いから、尚更急ぐ必要がある。

その時…

「あらあなたたち、さっきから固まってるけど、どうしたの？」

皆が振り返ると、優しそうな30代に入ったばかりと思える女性。

「ああ、いえ、恥ずかしい話ですが…宿屋…取れなくて」

「あらあら、それは大変ね」

本当に恥ずかしいのだろう、スフィアの声は段々小さくなる。女性は少し考えてから

「私、夫とお店開いているのだけど、一つの部屋が空いてるから使ってもいいわよ。一応仕切りがあるから男性と女性に分けれるわ。

宿泊費は私のお店の飲食代でどう？」

「…ええっ?!」「」

まさかの申し出に一同驚く。颯はすぐに直り

「本当にいいんですか？」

「ええ！雨風凌げる程度ですけど、お風呂が欲しければ近くの大衆浴場に行つてね」

女性の言葉に颯は振り返り

「皆、今日はこの方の提案に乗った方がいいと思うが…異論は？」  
全員無言で了承の意、また振り返り  
「その提案ありがたく受けたいと思います」  
「はい、それでは行きましょう！」  
女性は意気揚々と先導していく、  
先導された店は酒屋、中は熱気で充満していて、一気に冷える気候  
の外とは大違いだった。

「あなた、お客さん兼宿泊御一行さま！」

「……………、おう」

わお、何だか凄い仏頂面の男性、こちらを睨みつけるように見る

「あの、今日は一泊泊まらせて頂きます」

「おう、ここで食べるのか？」

「あつ、はい」

「王都か？クレア連山、どっちに向かってる？」

「クレアです」

「……………、分かった、座れ、明日の朝、スタミナのつくやつ食わせてやる、今日は野菜重視だ」

「あ、ありがとうございます」

無口の店主は意外と優しくかった。

ちなみに夕食は、野菜たくさん、肉がバランス良くのフルコースだった。

大衆浴場は野郎の話をしてもつまらないので割愛しよう。

ちなみに命知らずの若人が女風呂を覗こうとしたが、残念、既に気配を察したスフィアが床を磨くブラシの柄で覗く寸前のその男の額をつき

「今なら間に合う、直ちに戻れ」

と最終警告をして、男性陣が撤退したのは後で知った話

早く出た男性陣は出店を回る、出店は急拵えか、遊びの出店は少なく、飲食店が多かった。  
とりあえず近くにあった輪っか投げに挑戦してみたが、存外難しく、点数が入らなかったのには悔しかった。  
ので…

部屋に戻ると

「スコット、やはり力加減がし過ぎたかな？」

「どうでしょうか…」

「ソニックさんは…」

「……コントロール」

「「ああっ！」」

「何やってるの」

「ああ、ちよつと……」

「何でしょう？」

黙る…いや確実に女性陣に見惚れる男性陣

サラもスフィアも湯上がりでほんのり肌が紅色で、石鹸の匂いがする。

特にスフィアさん、防具を取るとかなり軽装になるからラインがしっかり見える。

「ライトフィナルは農業領なので、毎日湯浴みは香水より贅沢で幸せです、それではお休みなさい」

「あ…ああ、お休み」

スフィアとサラは微笑しながら仕切りの内側に行く。

颯は頷き、小声で

「今度はちゃんと部屋を分けるぞ、襲うとかなんだじゃなく、純粹に免疫ない」

男の中にずっと居た颯は大層真面目に言い、2人は頷いた。

そして翌日、主人の予告通り、朝でも軽くでもこの世界ではスタミナがつくといわれるやつが中心だった。

そして宿屋には礼に、何かあったら頼れと、早馬郵便の封筒のライトフィナルの領主邸の住所を書いて別れた。

「それではクレア連山、行きます」

「おう！」

スフィアの掛け声に全員が応じる。

「そろそろ実戦が欲しいですね……」

「フラグたてな……」

その刹那、

「しっ！悲鳴が……」

「……、ふう、フラグ成立か……行くぞ！」「しゃあ！」

馬が一気に駆ける。

悲鳴というより絶叫に近い声が山中に木霊する。

クレア伯爵領配下ベニ 男爵家筆頭騎士、ゼリアス・ベニ 率いる平民騎士5名、クレア領常備軍30名が戦闘を繰り広げていたが、戦況は最悪の一言だ。

ゼリアス達は、勇者召還に湧き、今まで遠方で左廻りルートしか使わなかった安全第一の商人、貴族がいきなり護衛もあまり付けず右廻りルートを使うという無謀なケースが多発、急遽右廻りルート安全のため、クレア領伯爵は領常備軍、騎士併せて約2000名にクレア連山の山狩りに動員した。

遂に10分前までは、普通に山狩り終了、山狩りから下山しようとした時、縄張りに敵が入ると、軍隊のごとく、リダを中心にしてムワクで包囲して殲滅にかかるフォスウルフにゼリアス達は囲まれた。

地元で、さらに定期的に山狩りをしている熟練の常備軍兵士、騎士である彼らなら1分で仕留めただろう。だが、普通とは異なっていた。

まず、非常に広範囲の縄張りの一部に敵の侵入が確認されると、その担当縄張りを警戒するのルフ数体が急行してどんな強大な敵でも果敢に攻める、そしてリダ ウルフが、敵は自分たちでは倒せないと判断すると、遠吠えで別地区のウルフに増援を求めて、最終的には総力を持って迎撃する。

それが普通で、山狩りをする人間の常識だが、今回は最初から50体近くの数で包囲の総力戦、更には普段出てくるはずのない、縄張り内で絶対権力を持つ、ファーストフォ スウルフが居るのだ。ゼリアスは焦っていた。ウルフはまとまって来る時予測される事態はただ一つ、縄張り拡大戦争。

しかしそれは出産期で子供が増えた時に時々起こる現象で、今は出産期どころか安定期真っ只中だ。

さらに最悪は重なり、奴らは必死にダレスの街へ向かおうとしているのだ、もしこんな大群が人里に下りたら…絶望的な考えしか浮かばない。

「くそっ…」

ゼリアスは片膝をつきながら必死に呼吸を整えようとするが、正直きつい。

ファーストフォ スウルフはご丁寧にゼリアスを集中攻撃しろとウルフに命じいたらしく、得意攻撃の突進を数体が同時に幾重にもやったので、立つのも難しい。目の前には勝利を確信して群の前に立つ下部リダ クラスのウルフ、

「ゼリアス様！」

「来るな！」

敵の攻撃準備を察して、ゼリアスの前に立とうとした兵士を彼は一喝する。

「お前は増援が来るまで戦うんだ」

「しかし…」

「しかし何も無い！大丈夫だ…」

ゼリアスは普段なら片手で振り回せる剣を両手で握りしめ、震える

脚を叱咤し、揺れる体を止め、ゆっくり立ち上がる。  
敵のウルフも悠然と構える。

「ベニ 騎士男爵家筆頭騎士、ゼリアス・ベニ ! 我が前に立つ獣共! 例え我が身が裂かれても、誇りと名誉を賭けて貴様ら斬る!」  
ゼリアスが宣言した瞬間、前に居たり ダ ウルフが突進しようとして後ろ足を蹴る。

ゼリアスは死を覚悟して迎撃しようとした刹那:

「間に合え ! !」

誰かの声と共に、風が駆け抜け、突進してきたウルフの体は骨の碎ける音を響かせながら半分斬られて吹き飛び、地面に着いた時には絶命していた。

「なっ?」

ゼリアスは立つたまま呆ける、そして目の前に

「よし! 間に合った! 大丈夫か?!」

文字通り滑りこんで来た、見た事のない防具を着込んだ男が言う。

「あ...ああ」

ゼリアスは安堵した瞬間、片膝をつく、男は

「お疲れ様です、後はお任せを」

と自信ありげに笑う。その笑いにゼリアスは不思議と頼もしさを覚えた。

視点変わって颯サイド

「ソウ様! 今の技は?!」

目を輝かせて聞くスフィア、確か剣とかに惚れたとか言ってたね、  
「ソウ様、スフィアは剣と聖騎士の繰り出す技に関してはそのくらい専門家よりも知識が深いです」

「ああ、なるほど...」

兄貴と同じオタクと言っちゃつか、

颯が行った技は、まずウルフとの距離を縮めるため、馬から飛び降り、足の裏に風を集めてロケットのごとく前に推進して、一気に距離を詰めた。しかし、予想より持続時間が短く剣の範囲外だったので、今度は銀剣に風で重力を収束、一振りすれば剣が届かぬ中距離から風の切断力を持った重力波を打ち込んだのである。

「とにかく間に合って上手くいって良かった」と、サラさん！」

「はい！分かってます、水の精霊、傷つき者に慈悲と加護を！」

サラさんが魔法を唱えると、ゼリアス含む戦闘不能の兵士には青い円錐が囲んで、円錐の頂点から雨のように青い光が降り注ぎ、苦しんでいた人は穏やかな顔に、疲れで動けなかった人は体力が回復したか立ち上がり戦おうとする。

「回復魔法と防御魔法を同時にかけてますので、重傷者にウルフを近付けません」

「ありがとうございます……、さて、スファイアさん、通常時もこんなに歓迎されるのかい？」

足場が悪いので、下馬してから長さ1mの切断重視の大剣を持つスファイアに聞く。ちなみに、ソニックの剣は日本刀に似ていて、スコットののは中世にありそうな剣であった。

「いえ、緊急時なので詳しい説明は省きますが、有り得ないの一言です」

「了解だ、じゃあ次、どうしたら倒せる？」

颯は剣を構えながら敵を威嚇する。

相手もリダ ウルフが倒されたので固まって防御態勢になっている。スファイアは

「敵はフォ スウルフの名の通り、下手な軍隊より規律が高く、連携攻撃は出来ませんが、逆を言えば全員兵隊で、個々で考える能力を捨てているので、一度不意を討てば、その攻撃者に注意が全て向かいます、しかし、私達の目の前に居るファーストフォ スウルフが遠吠えをして、状況を正したら、またこの状態、いえ、今度は死に

物狂いで向かってくるかもしれません」

「ん」

スフィアの言葉に颯は考える。敵は軍隊、あの馬鹿でかいウルフを封じれば万々歳：やれるか？

「皆さん…物は試しという言葉知ってる？」

「……えっ？」

颯の唐突な言葉に一同が啞然とする。そして……

「失敗したら援護よろしく！」

「えっ、ちょ……」

颯は剣先を下に構えると風の上に足を乗せるイメージする。

体は軽く感じ始め、実際に少し浮く、

ウルフは颯の練る気を感じてさらに警戒する、そして……

「しゅっ……」

「えっ？」

颯が踏み込んだ瞬間、彼は消えた……いや正確には目で追い付けない速さでウルフの数体を撫で斬りながら一瞬にしてウルフ達の後ろに付く。

「なに…あれ……」

「さあな……」

「しかし……」

「綺麗……」

颯のパーティー全員がはあまりの光景に声を失った。しかし、これだけは分かる。

颯の斬り上げた銀剣には、あまりの速さに返り血が無く、輝き、それはそれは美しい物に見えたという。

「今だ！フォ スウルフとやらを仕留めろ！」

ウルフは全員、完全に注意が颯に向いていた。敵を楽に仕留めるのは……今

「……！、はいつ……！」「……」

「道が開いたぞ！クレア領を守る我々の意地を見せる！！」

「ウオオオオ！！！！」

颯のパーティー及び、回復魔法で動けるまでに回復したゼリアスを筆頭に、クレア領の兵士も続々と突撃を開始する。

完全に注意を怠ったフォ スウルフ達の群れは、連携攻撃を得意とする群れでなく、ただの抵抗も出来ず、戦果の挙げやすい烏合の衆に成り代わっていた。

下では人間の本気でウルフは虐殺状態になり、上ではファーストフォ スウルフと颯の対峙が続く。

「あゝ、予想以上に面倒だ」

颯はため息を吐く、山の中のくせに、道の上はバトルフィールドのように平地が広がる。

敵はさすがは兵隊の頭脳、既に部下は收拾つかないと分かったと、自己防衛本能で完全に颯を殺そうとしている。

「当たれ！！」

颯は今出来るだけの力で敵の距離を詰め、重力波を打ち込むが、敵も体格似合わず俊敏に避ける。

「くそっ！！！！」

「ガウツ！！」

颯が突っ込むと、今度はファーストウルフ自慢の突進が来る。颯は何とか避ける。

そしてファーストウルフはまた颯の重力波射程圏外に逃げる。敵の学習能力が恨めしい。

「グルルル…」

「まだやれるんかい？！」

颯はまだ慣れない攻撃方法の連続で、精神が疲れてきたのだ。足とかはまだ痛くないのに、体が酔っているようなそんな不思議な感じである。

持久戦は自分の負けが確定する。ならばあえて突進を受けてファースト

ストウルフに零距离の一撃を与えるか……、いやそれは攻撃に耐える前提の話で、いくら聖騎士の防具が最強といっても、中身のまだ未熟な自分に響いて気絶でもしたらお終いだ……、増援を頼むか……いや、これは自分で仕留めたい。この何が起こるか分からない世界だ、ここで泣き言は言ってられない。

颯は必死になって攻略の糸口を見いだそうとしている。

「グルルル！」

ファーストウルフは構える、こちらが来ないなら自分から……か、

「真剣白刃取りみたいに取れたら……」

颯は呟きかけて、ふと気づく。

真剣白刃取りは有名だが……もう一つ、柳生の伝説にある技……最強の対居合い斬り技……

成功するかは分からない……が……

「今なら出来る……」

颯は自分に言い聞かせ、そして剣に風を纏わせる。目を閉じ呼吸を深くさせ感覚を研ぎ澄ます。

ファーストウルフは颯が動かないのを察してこの拮抗した状況から動かすため後ろ足に力を込めて、そして

「ガウツ!!!」

最大限に溜めてからの突進、いつまよりも速く、そして破壊力ある攻撃

人間には反応出来ない速さで間を詰め、ファーストウルフの勝利が確実とされた刹那……

目標の颯が目の前から消え、そして新たに認識したものにファーストウルフは止まろうと反応して……遅かった。

ドシュツ……

颯の横を通り過ぎたファーストウルフの首と胴体は横に両断されて、特に頭は数秒宙を舞ってから地に落ちる。

颯の賭けは成功した。彼がしたのは居合い返し改良型。

敵の居合いの軌道を見極め、先に敵の腕の部分に刃を置くと、後は敵の勢いで腕が吹き飛ぶという技。

しかし、よほどの熟練者以外は上段からの攻撃にしか対応出来ないという欠点もあるが…。

颯はファーストウルフの突進を居合いに見立て、敵をギリギリまで引きつけると、風で横にスライド、後は風で極端に鋭くして、突進に耐えうる骨を砕く重力波を流しながら両断した。

颯は安堵するとフラリと揺れ戻しを感じる。精神力を思ったより消費するようだ…

ナルシャンさん、もちっと説明ちゃんとしてくれ…。いや、自分が浪費したのがいけないのか？ そうなのか？

とりあえず、精神力の消費を抑える為に、今後は無駄遣いはせず、遠距離に放つのを自重して近接戦を重視しよう…

うんうんと颯は何度か自問自答をしては納得していると、

「ソウ様！」

「はいっ！！！」

呼ばれて颯が瞬時に振り返ると、やはりそこには委員長キャラ、スフィアさん！

「どこの世界に部下を置いて突っ走る領主が居ますか?!」

「済まない…だが機動力と、烏合の衆になった後のウルフ討伐を考えると、精鋭を残すのが妥当かと…」

「正直に述べさせて頂きますが、まだ異世界に来て浅いのに…襲われそうになった騎士を救った所は非常に良かったですが、いきなりボスを狙うなんて…危険ですからやめて下さい」

「申し訳ない！」

涙目になるスフィアにさすがに罪悪感を感じた颯は頭を下げる。

「お願いですから、私達を有効活用して下さい、あと、護衛はちゃんと付けて下さい」

「ああ…分かった」

颯は了解しながら心の中で謝る。濟まん、もしかしたらまた暴走するかも……

とりあえず、スフィアも言いたい事は終わったみたいなので、

「それで、戦っていた皆さんは？」

「はい、ファーストフォ スウルフの敗北により、敵の主従関係が解け、生存していたウルフは潰走しました、こちら側はクレア領兵士が、1人は噛み殺され、2人は細い道で戦い、山の斜面に落ちてもう……」

静かに言う。颯は十秒黙祷してから

「よし、では分析に「それは終わりました」」

颯が言いかけると、ソニック、ゼリアスが来る。

「もう報告出来るのか…サラさんは？」

「けが人の手当てをしています」

颯は驚いたように言う。そして

「お初お目にかかります、私、ベニ 男爵家筆頭騎士、ゼリアス・ベニ と申します。この度、我々の危機に対しての増援と最高の支援に感謝いたします」

ゼリアスは跪いて左胸を叩く、颯は

「いえいえ、困った時はお互い様です。ライトフィナル、侯爵代理執行、ソウ・セトギリです」

「ライトフィナル…ということは、あなたが勇者ミノルの弟君！」

「良くご存知で…」

颯は素で驚く。ゼリアスはもちろんと

「勇者様誕生の手紙に書いてありましたので……まさか聖騎士になつてましたとは…、それではやはり騎士も、セルドリック家とハリ家ですか」

「良く知っているな…」

ソニックが感心するように言う。ゼリアスは

「それは我々が代々守ってきたクレア連山を良く通る、商人、騎士

の名前を徹底して覚える慣習がありますので……」

「……へえ……」

彼はそう言い、周りは驚く。何て記憶力だ！  
と、話がずれてきたな、

「それじゃ、そろそろこのウルフについて説明してくれる？」

「あつ、申し訳ありません、では私が」

ソニックが颯の前に出ると

「結論から言いますと、彼らは北の地を縄張りにしてたフォ  
ルフ一族で、大移動でここに来たと思われます」

「北の地から？どうして分かったんだ？」

颯が疑問を呈す、今度はゼリアスが冷静に

「毛です」

「毛？」

「はい、大分抜けてましたが、死骸のウルフは、我がクレア領でも  
珍しいくらい毛が多かったです。我が国、特に西部地方は冬でも  
暖かい地域が多く、通常ウルフの毛は少ないです。逆に北の地は秋  
でも寒く、冬は雪に閉ざされるので、先に言いました通り毛が多い  
のです」

「ちよつと待つて」

スフィアが入る

「確かフォ スウルフはどんな環境下に置かれても、絶対に、最後  
の一体が死ぬまで縄張りを譲らない動物で有名よ」

「そうなの？ソニックさん」

颯はソニックに聞く、ソニックは

「ええ……ソウ様、スフィア、これは推測の域ですが、恐らくは北  
の災厄の勢いがいよいよ増し始め、縄張りを死守主義のフォ スウ  
ルフも野生の勘で南へ南へと逃げ始めているとしたら……」

ソニックの言葉があながち間違いでないという雰囲気の流れる。

「時間は意外と人を待つてくれないな……しかしまだ負けたくわけでは  
ないし、勝ちにいくつもりだ。今は動物の勘は信じないぞ！」

颯の宣言に周りは少しだけ笑う。そしてゼリアスは

「しばらくは山狩りを定期的にやります。それとソウ様」

「ん？」

ゼリアスは左胸に手を置き

「もし、我が国が災厄と全面戦争するとき、そしてあなた様が指揮をするならば、我がベニ家、あなた様の指揮下に入り戦いましょう」

実質の忠誠宣言、颯は断るのは失礼と習ったので

「分かりました、もし戦争が発生した時はお願いします」

「ありがたき幸せ」

双方で笑う。

「あの、皆さんの応急処置完了と、クレア領兵士の増援がきました」

「報告と適切な支援ありがとう、サラさん」

「当然の事をしたまでです」

いつもとあまり変わらない普通の表情だが、少し嬉しさを含んだ声に颯は聞こえた。

ゼリアスは、

「討伐や治療でお疲れなら、我が家で休憩出来ますが、いやお礼に是非」

「皆さんは大丈夫？」

「大丈夫です。魔法量なら自信ありますので」

「私達は大丈夫です。むしろ修行したいです」

「「同感です」」

全員から答えが来る。颯は

「せっかくのお誘いですが…」

「いえ、旅の安全、武運長久を」

ゼリアスは気にしてないという口調で、そして祈ってくれた。ほんだけいい人なんだ。

颯達は道に置いてた馬に乗ると、ゼリアスに

「それでは、また会える日まで」

「はい、会える日まで」

クレア領兵士と、平民騎士に見送られて旅を再開する。

「さて、皆、遅れた分を取り戻すぞ！」

「……はいっ！」「……」

旅はまだ始まったばかり…。

## 星空の下の告白

クレア連山を馬で駆けて早2日目の夜、颯達はウルフとの戦闘で発生したタイムラグを返済して、むしろ好調な早さで行程が進み現在は7つめの山の山頂に近い場所の開けた場所に野宿をしている。

好調な理由は2つ、1つは颯が早くに馬のパルトナ と心通わせて山を踏破する技術が劇的に向上したから。

もう1つは北の地から逃げてきた魔物の多さからクレア領伯爵の要請で、山狩りのプロの王立正規軍第11討伐旅団分遣隊約800名も山狩りに参加、クレア連山は今までに無いくらい安全地帯に変わっていた。

まあそのせいで、修行の為に通ったのに…とスフィアが愚痴を漏らしていたのはご愛嬌だ。

ちなみに統治貴族が有する軍は常備軍、王国が有する国防軍は王立正規軍と呼称しなければならぬらしい。

理由は準軍事組織の常備軍が正規軍と言われるのが癪に障るという、単純明快な理由であり、颯は苦笑するしかなかった、焚き火の火を囲みながら、スフィアは地図を広げて

「この最後の山の下山は非常に楽で、今までのペースを鑑みて明日の朝には左右廻り合流地点にして西部地方中核都市、ベルグランドに到着しますね。ソウ様もお世辞抜きで馬術の実力の上がりが良くて正直驚いています」

「そう言ってもらえると本当に嬉しいよ」

颯は安堵しながら言う。まだまだだとかスフィアさん達に言われたら少し沈む。

いやもう、やんなるくらい山を登ったり降りたり登ったり降りたり下ったり…降りきってふもと間近で今度は連山の中で最高峰の山の頂上へ休まずアタック！

馬術というか、もうただひたすら山道を振り落とされずに行くかと

考える前にしがみついていたも同然である。ていうか…

「スフィアさん、ここ本当に近道？」

「ええ、右廻りクレア連山踏破ルートが一番の近道です。左廻りならベルグランドまでこのルートの踏破日数の3倍、途中ふもとを通る、右廻り安全ルートだと1.5倍はかかります」

颯の質問に即答するスフィア、さすがです…。そしてはたと気付く「中核都市ベルグランドって言うてたけど…どのくらいの規模なんだ？」

「ええと…見れば分かります」

スコットが言い、周りも頷く。

「まあ私達の口で言っても想像しにくいです。何てったって、法国の街ですから…」

「法国？確か勇者召還の調べに使った図書館があつたのがアルテリア法国だったよな？」

颯の言葉にソニックは頷き

「そうですね、この大陸の聖十字教会の総本山にして教会の独立自治国家、アルテリア法国。我が国の西側にある隣国で、国土は教会施設と国民居住区で殆どを占め、食料や工業品海外依存度がほぼ100%なのです」「ひゃ…100って…いやしかし、いくら隣国でも、地図で見る限り距離は離れている、なんで法国の街なんか…」

ライトフィナルは西は西でも西北西の山を越えた「まだ山があるんかい！」所にあるからあと1週間「道が悪いので慣れてない颯だともっとかかる」くらいかかる。

対して西南西アルテリア方面は、確かに地図にはつきりと整地された道が記されていて、かなり早く進めると推測されるが、縮尺を見れば商人が急いでも3日間はかかるだろう。

「それは統一戦争以前、ベルグランドの前身、グランド公国公王が聖十字教会絶対信仰の方だったからです」

答えたのは意外にもスコットだ。彼はこの大陸の歴史には強いと、スフィアからあとで聞いた。

「統一戦争末期、今のサベルレピアが建国された際、その圧倒的な戦力を見た当時公王、ベル・クランシスタが無血併合を提言、併合しました。その時に戦争の恐怖に怯えているサベルレピアの民に、当時はその地域では普及していなかった聖十字教会をここぞとばかりに布教、瞬く間に広がり、国民安定に貢献した報奨に、サベルレピア国王からは公国領を公爵領に改め、ある程度優遇された特別自治権と本領安堵。聖十字教会からはベルの功績を称え、ベルグランドに改称と、更にはアルテリア法国の必要物資倉庫、法国内商売独占権、信者の為の宿泊施設、法国に負けない大きさのサベルレピアの聖十字教会の総本部があり、多大な寄付金も集まり、経済規模は王都と同等、それ以上になります」

スコットは言い切ると、歴史の話が出来て満足感に溢れた表情をする。対照に颯は思案顔をする。

やはり聖十字教会は戦争から発展した教会か……

日本でも太古から政情不安の時代に宗教が飛躍的に伸びた。どの世界も人は何かにすがりたくなる生き物なんだな……颯は一人で納得する。

その後も今度は日本について問われ、颯は当たり障りない程度に談笑した後、

「さて、そろそろ明日の為に寝ておきましょう、夜間警戒は……」

「スフィアさん、その仕事やらせてくれないか？」

「えっ？」

颯の提案にスフィアが固まる。颯は構わず

「異世界の経験は早く慣れたいし、サバイバルの勘を鈍らせたくな  
いから」

颯は自分だけ何もしないのは嫌だという言葉は隠す。絶対にスフィア他メンバーは何か言うから。

スフィアは何か言おうとしたが、やがて

「はあ、分かりました。2時間で交代ですからね。絶対に無茶せず

何かあったら叫んで下さいよ？すぐに行きますから！」

「あ…ああ」

スフィアの注意の連続で颯がおののく、そして周りは

「「お母さんと子供だ…」「」

と、笑いをこらえていた…。

夜の山の中、時折風が木の葉をゆすり、葉音を奏で、焚き火の木は時折パチツとはじける音が聞こえる。

これは作者の独白だが、山の中の夜は本当に静かで、夜間に一心テント見回りの係りをしていると、この葉音が心地よくて眠くなって…。でも寝れない地獄が…。

#### 閑話休題

颯はあまりにも暇で、段々と瞼が重くなってくる。首のペンダントを通じて、狭間のセルフエに現状報告しようと思ったが、もしかしたら寝てるかもと、颯は遠慮してやめた。やっとこ1時間経過、あと1時間：颯はぼうっとしながら星を眺めて、現世のころの星座と全く合わないので、仕方ないから満天の星空の星を端から数えてみようという、全くもって無意味極まりない絶望的な挑戦を始めようとした時

カサツ：

颯は足音の方に素早く向く。もちろん剣は即抜刀可能にして…としたが…

「…サラさん？」

颯の目の前にはサラが立っていた。彼女は

「眠れなくて…、隣いいですか？」

「あ…ああ、いいよ」

「失礼します」

サラは言うつと颯の隣に座る。火でぼつと浮かび上がる彼女の横顔に颯はやはり見とれる。

しかしいつも思う事がある。彼女の横顔はいつも何かに憂いでいるような気がする……中学卒業から女性との出会いが無いお前に何が分かる！という声が聞こえてきそうだ！

「あの…ソウ様？どうかありませんか？」

「へっ？あ、いや…悶絶？」

サラが心配そうに聞いてくる。どうやら無意識の内に心の葛藤が体に出てたみたいだ…サラさんは俺の行動を見てクスリと笑った。

あああ！軽く死にたい…

その後、サラは

「あの時…初めてだったんです…魔術で褒められたのが…」  
急に語り出した。あの時つて…

「2日前のウルフ戦か？」

「はい。私はこれまで一度も……正確に言えば前の主ナルシヤン様に仕事に関して褒められた以外、私は褒められた事はおるか、軽蔑を受けて生きてきました」

彼女の言葉に颯は困惑した。

「えっ…でもサラさんの魔法は非常に優秀で君が褒められないとか貢献してないとか…正直考えられん」

「そこまで高く評価していただき光栄です……少し昔話をしてもよろしいでしょうか？」

サラが聞いてくる。彼女の顔は何かの決意を固めているようだ。

「ん、聞かせてくれ」

「ありがとうございます。それではまず、私の家と生い立ちから…」

私はメルシヤン家のサベルレピア分家の人間です。メルシヤン家は太古の昔から錬金術を研究していた大陸有数の術師集団…正確には現在でいう銑鉄の技術を大成させた人達で、メルシヤンはその集団のリーダーの名字で、集団の部下を義兄弟として契りを結び名字を変えてメルシヤン家を誕生させました。

そして250年前、統一戦争が始まる前から度々起こった内乱、更には金属製品開発で金属類慢性的に不足、非常に巨大だが、生産量が少ない銑鉄工場でなく、工場規模2割を小さく、生産量を3倍を当時、大陸の大半を有していたペルテ帝国皇帝に勅命され、銑鉄技術の向上の為にメルシャン家は合法非合法全てに手を出し、やがて魔法の理論発見と、銑鉄の技術向上に成功しました。

特に魔術の発見は、技術での術師から本物の術師に変わった事が騒動になりました。

魔術の本当の目的は、工場無しで1人の人間が石から銑鉄出来る錬金術を開発しようとした過程で発見された物で、銑鉄には失敗しましたが、他にも用途があると研究を始めました。

魔術の理論は簡単でした。まず内面の精神力にある属性を見極め魔法回路を作ります、もちろんその回路作りには命に関わりますので、厳しい試験があります。次に精霊が常時大陸に流している力と精神力を合わせ、詠唱や印を結ぶと魔術が発動します。

この魔法技術は間もなく起きる統一戦争で最重要研究課題として、帝国から離反して大陸覇権を目指す諸国は競って魔術軍拡を行います。

特に元から兵士、騎士が潤沢な上、魔術軍拡が上手く行った、ブランドティア、シグラド両帝国が統一戦争末期に大陸覇権候補になったのを見た諸国は、更に魔術軍拡に全力でした。

メルシャン家はこの戦争に対して権威拡大を目指し、メルシャン直系のいわゆる本家が今の聖十字教会を設立。昔からの銑鉄から発展した金属加工技術と魔術で、聖騎士の武器、防具開発に成功、さらに魔法詠唱の単純化と、通常は同時に別の属性魔術は使えないのを使用可能にしたりと、魔術の最先端を独占しました。

サベルレピア分家は、この王国には特に聖十字教会が密接に関わ

っているので、本家の愛弟子の特別分家を宮廷魔術師に登用されま  
した…

サラは話すのを止める。颯は  
「……、メルシャン家の話は分かった…てか、この聖騎士の装備つ  
て君の家が作ったんだ」

新事実に驚くのと同時に、次の言葉から中核部分と確信した。

「それで…、何で軽蔑されているんだい？」

サラは少しの間沈黙した後、口を開く

「メルシャン家は初代から無茶な人体実験を自分の体にやり続け、  
さらに絶対的掟として、血が濃すぎず薄すぎずにしたため、メル  
シャンの魔術の漏洩を防ぐ為、計画的にメルシャン一族内の結婚、  
交配、そして出産をするので、一族は絶対に青髪と茶色目になりま  
すが、私は……」

言々と糸目の彼女が目を開く…

「……………」

颯は黙ってしまう。茶色目でなく、彼女の目は透き通ったエメラル  
ドグリーン、肩まで伸ばした青髪にマッチして、可愛いでなく綺麗  
…、いや何とも形容しがたい雰囲気醸し出している。

「私はメルシャン一族の掟を破った父と、父の従者、見習い魔術師  
の間の子です」

「……………」

来ちゃいましたよ重たい展開……、いや真面目な話だから茶々は入  
れないさ。

兄貴はどんな反応するのかな…

「私の母は、私を産むと同時に亡くなり、父は掟を破った事を隠蔽  
しようとしたが、結局はバレてしまい、父の本妻、サ チエ様  
は私を殺そうとしましたが、本家からは一応この世に授かった命だ  
ということ、私は魔術回路を組み込まず、とりあえず生かされま  
した。しかし私は数百万に1人の元から魔術回路を持つ祝福と呼ば  
れる体質で、さらに親からは愛情は受けず、書庫で唯一無二の話し

相手の司書さんから魔術の本を貸してもらい、練習していたら、血の影響かいつの間にか、回復の加護の水、防御の地、遠くの人へ伝達出来る念話を身につけていて、8歳の頃にはメルシャン一族でも筆頭クラスの能力を身に付けました」

「……」

予想以上に重たい…

颯は何と声を掛けようか迷う。

サラは星空を見上げて続ける。

「私は魔術が出来れば少しは認めてくれる。口を利いてくれない家族も少しは目を向けてくれる…そう思い意気揚々と父上とサ チエ様、義兄弟に披露しました……」

「結果は……聞くまでないか」

「ええ…8歳の自分を止めに行きたいです。披露した翌日から、さらに私は私の居場所を潰され、冷遇されて、そして仲良かつた最大の心の支えの司書のベヌ さん、差別せず普通に接してくれた執事長キットさん、侍従のシモンさんからも隔絶されて、屋敷内の離れ部屋に軟禁されました…」

彼女の目は伏せがちになる。瞳はまた糸目に戻りつつある。彼女は続ける。

私はお母さんを恨みました、瞳の色を見せなかったために目を細めていたらいつの間にか開けるのが逆に難しくなりました。寂しくって堪らない日々が8年も続きました

そして成人16になった時、私は遂に家から放り出されました。

魔術師は通常は5年満足に魔術が放てなければ、魔術回路が劣化を起こし、最終的には魔術が一生、絶対に発動しない体になる…通常は、しかし、祝福の体は違ったみたいで、魔法回路は永久に劣化せず、稼働したまま野放しにしたのは彼らの誤算ですね

話を戻します。

私は隠し子であつた為戸籍が無く、王都から戸籍審査が無いと出られないので、魔法を隠し、経歴を詐称して城下町の男爵の侍従の仕事を得て、メイドになりました。

仕事は忙しく、給金はそこそこ良く、上司も良い方でしたので、メルシャン家とは仲の悪い家出身と言い、上手く隠してもらつたので何とかバレずにいきました。

2年経つた頃、遂に私は腕を認められ、王命で王城内の要人専属メイドに登用され、そして配属されたのは、聖十字教会からの出向の司祭にして宰相のナルシャン様に仕える事になりました。

「ほ、んっ？聖十字教会の分家と仲悪くて聖十字教会関係者に仕える？」

なるほど…わからん！！

颯は不思議がつていると。サラは微笑しながら

「王命で王城の侍従は、その職に就く者としては最高の荣誉ですが、分家の確執がある私には辛い事でした、しかしナルシャン様は私の本当の経歴を知つていて能力も確認済みでした。そして知つてたからこそ私を守る為に無理やり宰相専属メイドに配属してくれました。そして今回ソウ様の従者に私を指名したのも私を王宮から脱出させようと思つたからでしょう…多分。ソウ様の一員なら戸籍審査無くでれますので…。なので昔から今そしてこの世に居る限りナルシャン様へのこのご恩は忘れません」

「へ、じゃあナルシャンさんに好意ありか？」

颯は一応聞いてみる。兄貴ならこう言うだろう、てか言つてた

根回しして守る主人と尽くすメイドの主従関係に恋愛感情が芽生えないわけがない！少なくとも二次元ではっ！！

「いいえっ」

……、兄貴、残念だつたな。

「確かに恩はありますが、恋愛感情は抱いてません…いえ、長い間軟禁されてたせいか、喜怒哀楽はメイドの仕事の中で大分蘇りましたが、恋愛とかそういう特殊感情というのが分からないのです」

哀しみ漂う微笑が似合うサラの顔を見て颯はやはりどぎまぎする。

同時に思い浮かぶ疑問、颯は口にする

「なんでこのタイミングで打ち明けるんだ？そもそも、まだチームを組んで間もない異世界から来た素人に…」

颯が言うと、サラは

「一言で言いますと…私を受け入れてくれるか知りたかったからです」

「……」

「私の素性は掟から外れながら命は何かある忌み人、本当はライトフィナルに着いてから打ち明けようと思いましたが、ウルフとの一戦で魔術を使いました。王都から近く、更に大規模な戦闘で、同時に地と水の複数魔術と通常の魔術師より遙かに大規模な魔術使用、何より勇者ミノル様の弟君ソウ様の戦果ともあり、多分王城には私達の戦闘記録がクレア常備軍を通じて行われるでしょう。そうすれば私が魔術を使用した事実がわかり、あの家の権力を行使すれば、何とか今の今まで隠せてた経歴と魔術が使える事も露見するでしょう。もしかしたら私のせいでソウ様達にご迷惑をおかけするかもしれません。だから私は…」

「私は…どうした？てか長い…」

「えっ？」

「質問してもいいか？」

「えっ…は、はい」

颯はサラの方を向く。彼女は小さい声で了承する。

「じゃあまず一つ、そんなリスクを知らながら何で大規模な回復魔術を行った？隠したいならある程度小規模にして見殺しすれば良かったんじゃないか？」

「…っ、そんなこと…!!」

カツと目を見開き口調が少し荒れるサラ。

予想通りだ。彼女は救える命は絶対に救う。慈母の人だ。

「悪い、今の挑発は不謹慎だったな。しかし君の本音を知りたかったからの措置だ、見逃してくれ。じゃあ2つ目、サラさんはこのまま俺達とライトフィナルに行かずに離れたいか？」

「！、え…あ…」

見開いた目は、普通の目の開きに戻り、緑の瞳はあきらかに揺れ動き、視線は泳ぎ、口はあわあわと動いているが声は出ていない。完全に動揺してるのがバレバレです。

「いや、推測だけど、サラさん、迷惑かける前に離れますとか何とかさっき言おうと……凶星ね」

見るからに緑の瞳が潤んでる。しかし切り出したからにはしっかりと聞こう。颯はそう判断して

「あなたの本心に問うよ？サラさんは離れるか離れないか、どっちがいい？離れたいと思うなら、俺はちゃんとした理由として受け止めて、しばらくの生活費として5万レピスと移動用として今の馬をあげて分かれよう。ちなみに俺個人としては離れてもらいたくない」  
颯は何だか告白みたいなセリフで体が熱くなる。サラも無言だ…続けていいかな？恥ずかしいが今が正念場だ

「今の俺達のチームで唯一の高度魔術使用者、その戦力は今から、そしてライトフィナルの未来においても重要なんだと思う。実用から先に言ったが、俺はこの異世界に来てからの初めての仲間だ。何があるうと信じて助けるつもりだ。それは真実を知った後でも変わらない」

一度信頼する仲間、友人は基本的に裏切らないし見捨てない。甘いや妄言とか言われるかもしれないが、それが颯である。ちなみに裏切ったり、一度敵と認定されたら本気で死を覚悟しなければならぬ。

「んで、どうする？」

颯はあえて聞く。彼女は

「……付いて…行きたいです」

「よし、その言葉を待っていた、ちなみに産みのお母さんの名字…覚えてるか？」

「えっ？」

颯の言葉にサラは少し戸惑いを見せてから

「お母さんの名字はシュティルですが…」

「シュティルね…サラは父親は何らかの理由で居ないので、母親の名字になった。戸籍はライトフィナル領主が責任を持って証明する。サラ・シュティル、今後から俺のメイド兼魔術師側近をしてくれるか？」

颯は柔らかい昔の表情に戻り、ゆっくりと手を差し出す。

サラは驚き、そして顔を少し赤らめながら颯の手を握り

「サラ・シュティル、ライトフィナルとソウ様に全身全霊を以てお仕えいたします」

微笑しながら言う。

「ああ、よろしくな！」

颯は言いながら早めに手を引つ込めてしまう。

柔らかい彼女の手、颯が立って彼女が座ってるため自然になる上目遣い+破壊力抜群の少し涙ある微笑

免疫力無い颯には一撃必殺である。サラの方は早く手を離されて少し不満顔をする。

「んじゃ、悩み相談は終わりかな？」

「はい、ありがとうございます。ソウ様」

サラも立ち上がり優雅に礼をする。うん、吹っ切れてるな。

「よし、まあ悩みが無くなったなら明日の為に早く寝な」

「はい、おやすみなさい」

「んっ、おやすみ」

サラはもう一度礼をすると寝場所に立ち去る。颯は手を軽く振って

見送ってから、また座り

「よし、数えるか！」

絶望的な星数えを始めた。

ちなみに529個目で次のスコットが来たので交代、やはり彼も星数えに興じたそうなの…。

翌朝、サラの話をして皆にこれからはサラ・シュティルとしてライトファイナルの一員として助け合い守って欲しいと頼んだら、二つ返事で彼らは同意した。

やはりこのチームは良い人というか人を良すぎる真っ直ぐすぎると颯は思ったとき。

## 波乱の学園祭

空に太陽が昇り始めた頃から行動を開始する颯一行。

頂上近くまで登った後は緩やかな下り坂、曲がり道を曲がって早3時間。馬の振動で舌を噛まないようにするため全員無言でいるが、前よりこの無言タイムの雰囲気が良い意味で変わった。

理由はサラが大分打ち解けたからだろう。

昨夜の颯に話した真実を仲間全員の快く受け入れて貰えたのがきっかけで、彼女は糸目より美しいエメラルドグリーンの瞳を出す機会が多くなり、相談、返答、呼び掛け以外の口数も多くなったので、今までほんの少し感じたピリピリ感も無くなり団結している。

後はもう少し主従関係より楽な関係になりたいと思うが、同時に今が互いに丁度良い距離と感じているのでこの事はもう何も言わない事にしよう。

颯が思っていると…

「見えました、あれが西部地方中核都市にして克蘭シスタ公爵領、ベルグランドです」

「ん…おお…」

スフィアの言葉で現実に戻ると、目の前に広がるは

「でかいなあ〜」

颯の口からはそんな言葉しかでない

山から眼下に広がるは上から見ると気付く正方形、しかも大規模施設以外は碁盤目状に区画整理されてる整列都市だ。

時刻は元の世界の9時くらいなので、都市は人で活気溢れているように見える。

しかし…

「王都にはあつた防壁が見当たらないな〜」

この時代に珍しいと思ったら

「この都市は法国に次いで、の聖十字教会の聖地ですから、侵略なんてしたら大変です」

「？」

答えるのはサラだ。颯の質問攻撃から彼女自ら進んで返答するのに、颯を始め皆が少し驚く。サラはその雰囲気戸惑い

「え…あれ？私じゃ不味いですか？」

珍しく少し狼狽している、颯は慌てて

「いや、初めて反応してくれたからそれで驚いてしまったんだ。…むしろサラさんが自分の質問に答えてくれるようになって嬉しいよ」慌てすぎて、自分の言った言葉すらも覚えてない。颯が言い切ると、サラは少し安堵の顔を浮かべてから、いつもの表情に戻り

「では説明します。このベルグランドは昨夜皆さんが話してしました通り、アルテリア法国のお膝元、直属の保護領であるため、ベルグランドに侵略する国があるならば、門徒や職員、法国騎士、更には敬虔な平民信者が武装して集まって、さらに各国軍も…」

「ああ、予想出来たわ…」

一向宗の加賀の一向一揆、国土防衛バ ジョン+連合軍か…納得出来た

そして前を見ると

「あのドでかい城と塔は？」

颯が指差す先には、白亜城とも思える白い城、そして高さ1000m近い塔

「あれこそが、大陸で二番目の規模を誇る聖十字教会地方総本部、法国総本山の直属機構で、神の伝言を我々下界の人間に伝えるとされる、神託司祭を筆頭に、司祭、魔術師、事務職員、守衛兵、公爵領主クラシスタ様、その一族と配下の人で合計約1500人が在籍します」

「ほ…」

サラが言う。颯は驚き交じりの声を上げる。

予想以上に宗教が根強い地域だ。

更にクランシスタ家はあの教会にベツタリということも分かった。  
だが宗教と癒着しすぎてないか……

ボンツ！

「んっ？空砲？」

いつもの自問自答or熟考タイムに入る前に破裂音に遮られる。白い煙りが青い空に漂ってやがて吸い込まれるように消える。その下を見ると

「あのだでかい敷地は？」

何だか学校に見える。スフィアは

「ああ、あれは我が王国で最も伝統がある高等教育機関、王立セルシオ学園です」

「高等教育機関？この国はどどういう教育制度なんだ？」

颯は聞く。今度はソニックが

「この国には、各領地にある統治貴族が雇った教師、又は文官貴族の家臣が学校を開いて、各学年日を分けて、七つの日を開けて、毎月約4〜5日、読み書き計算の教育を6歳から16歳の10年間無料で受けます。これは王命で、国民が商売出来たり、軍に入るなら兵法を理解させる為の政策の一つです。実際にこれのお陰で、最初は平民に対しての無駄遣いと貴族は馬鹿にしましたが、今はこれで生産量や商売が急成長、税収もすこぶる良くなったので、今は推進派がほとんどです」

つまり学年ごとに日をずらして、キリストの日曜学校を義務教育にしたようなものか。

「先見を見据えたいいい政策だな」

颯は素直に感心する。

この国は教育の効果を知っている。教育論者では無いが、文字が読み書き計算外国語が出来たりするからこそ自衛隊の武器が使用出来るようになったからな。

ソニックは続ける

「そして、その学校より遙かに高い学力を養成する機関、それが王立の高等教育機関です。今日の前にあるセルシオ学園を筆頭に、東西南北に平民、貴族合同の、そして王都に、貴族専門の学園があります。

一般の各領地で6年間、学校以外で死に物狂いで勉強して、各領地領士の推薦状を貰った者のみに受験資格が与えられ、厳しい競争に勝ち抜いた勝者のみ入学が許されます。それは王都の貴族だけのセントラル学園を除いては貴族も平民も同じ試験が与えられます。

特に西のこのセルシオ学園は人気で、定員は全学園最多の1000にしても、3000人は受験しますので倍率は高く。これは全受験者の4割に相当します」

「相当激しいな…推薦貰うにも大変なのに」  
颯が呟くと、今度はスコットが

「毎年のこの国の出生者数は、各統治貴族が管理する戸籍で把握する限り平均して22万人、対して推薦、受験資格者は最高8000人です。更に全学園での合計採用者は4000人です」

「本当に厳しいね」

苦笑するしかない。全入時代の日本の大学とは大違いだ。

「しかし学園に入れば、全寮制で衣食住全て無料、毎日が高水準の勉強で平民にとっては万々歳、通常は8年制で、卒業は20歳ですが、早期卒業制度を利用すれば4年生で卒業出来ます。ここで4年生で卒業しても、未来の職業は、商人の重役候補や、領地の役人など安泰職に就き、同じ一般学校卒業の同年代の人と比べて平均して給金も2倍にはなり、未来の家族や、実の両親を楽にさせるだけの経済力を持ちます。

そして8年生で卒業した者は、周りから勝手に重要な中央院庁、王国の重要機関から声が掛かります」

「……………、学校様々だな！」

超高等遇に、少し羨ましさを感じる。いや自分は兄みたいに学が無いが、あったらそんな感じになるのかな…無い可能性をうじうじ言っても仕方ないので、

「しかし、なんで西からこの学園制度を導入したんだ？」

「貴族達が無駄な施設を置くのはバカバカしいと、唯一、西部地方の貴族諸侯は有益を信じて最初に創設しました。ここに建設されたのは分かりますよね？」

「ええ、簡単に予想つきます」

スフィアが答えて、颯は宗教の力に恐ろしさを感じる。祝いは神仏混交の宗教は無論信者がほとんどの日本人だからか尚更だ。

てか、皆さん親切に教えてくれてありがとう！

颯は何度も言つて、何度も感謝しなくても大丈夫ですと言われているので、心の中で言う。

そして迷惑承知で

「じゃあもう一つ質問！あの学園は何故空砲撃った？今日は何の日？！」

「…分かりません！」「…」

颯の質問に騎士3人が即答、さすがに知らな…

「多分学年末の学園祭兼選定会じゃないでしょうか…」

「ああっ！！」

「サラさんそこ詳しく」

騎士3人も思い出して声を上げる。

「学園祭とは、年に一度、学園の門戸を3日間開放して、魔術や騎士、哲学などの研究内容の成果を平民から貴族、国役人まで無差別に披露する祭りです。同時に、早期卒業予定の3年生、又は6・7年生が未来の先輩になる重鎮や院庁勧誘員にアピールする場でもあるため、通称選定会とも呼ばれます」

「ハドな祭りだな」

「それ以外は普通に平民の方にも楽しめる祭りですが」  
颯は苦笑する。そしてはたと気付く。

「そうゆうことなら、スフィアさんとソニックは学園出身とか？」  
「いえ、違います」

2人から返される。スフィアが代表して

「私達ライトフィナルは山に囲まれた地形で、正規の道も一本しか無いので、良く言えば自然に囲まれた領地、しかし実質、それで閉鎖空間にしていますので、学園とか外の世界に憧れませんでした。なので、文官貴族、メリラス家の爺に勉強を教えてもらって、後は剣術に傾倒していました」

……何だかどんな領地が不安に感じて来たぞ。

まあそんな不安もさて置いて…

「スフィアさん、確か予定よりも早く道中進んでいるよね」

「え…ええ、1日分位は」

「んじゃここに1日滞在しても大丈夫かな？」

「えっ？まあ…て、まさかと思えますが…」

「うん、学園祭見に行かない？」

颯の申し出に皆が顔を合わせて、そして

「分かりました。急ぎすぎもいけませんね。ただ騎士の格好は目立ちます。厩衆に馬を預けて私服に着替えてからですね」

「んっ、了解した」

スフィアの言葉に颯は頷く

「しかし何故学園祭に興味持ったのですか？」

スコットの質問、そういえば理由言っけなかつたな

颯は国の歴史とライトフィナル改めて良く調べるのと、基礎知識が収集出来るならしたいのと、単純に学園祭に興味があると言おうとした時

「嗜好…ですか？」

うん…？サラさん今何と？

「確か学園指定の制服を着る女学生やまた着る趣味を持つ女性を見るのを嗜好としてる方が居ると書物で」

「ちよつ、え…」

サラさんが爆弾発言！てか彼女の言う書物は

「サラ！で…でも主君ソウ様が望みなら…」

スフィアさん、何言っちゃってるの？！

「……………」

何とか言ってくれ男性陣

「とにかく俺にそんな趣味は無いわ！兄貴に言ってくれ！」

「……………えつ…ミノル様は間違っても無いでしょう」「……………」

みんながいじめる…。てか時々彼らはいじってくる。

てか兄貴め！本性隠しやがって！

「とにかく違うわ〜！！」

珍しく颯は叫んだ。

そして何だかんだで下山して…

ベルグラント

人口60万を越える、しかし商人、信者の滞在で、滞在者数を含めると70万になると言われる。

前の徹を踏まない為にも、早々に値段そこそこで綺麗な宿を確保、颯達は私服に着替えていた。

颯はナルシヤンからの支給品の長袖Yシャツにジャケット、元の世界にもありそうなズボンとシンプルタイプ。

他の2人も、特にソニックはイメージした貴族の格好から離れて、颯と同じような格好だった。スコットとソニックの服装の大きな違いは、普段から守護まじりがあるとされるとされる、銀のリングをソニックは腕に付けている。

そして待っていると…

「お待たせしました」  
「おおっ……」

女性陣が到着した瞬間、男性陣から驚きの声

スフィアは、その時代の公序良俗「女性が足を出すのは基本タブー」に合わせつつ、動きやすさを重視の長めの青スカートに上もフェルト生地を着ているが、スカートから見える、鍛えられながらシユツと引き締まった、筋肉質でもなく魅力的な脚を覗かせている。スフィアは

「ソウ様、どうでしょうか？」

「あ…ああ、綺麗だね。騎士の姿は凛々しくて、今は凛々しさの部分が綺麗になった…ごめん、全然言い方なっていないね…」

マジ男性だけの生活に浸りすぎて、女性の事を上手く褒めれないのは地味にきついと颯が心の中で悶えると

「いいえ、十分伝わりました」

微笑するスフィア、顔が整ってる方の微笑は破壊力があります。で…

「サラさん…なぜメイド服？」

サラは王宮で見たのとは違うが、間違いなくロングスカートのメイド服だ。

「これはナルシャン様から頂きました、ライトフィナル用メイド服です」

「えと…しふ」

「ソウ様、これが私の私服であり、主人に対しての礼儀です」

「あ…ああ分かった」

思わず苦笑する颯、意外なプライドだな。

まあ、これで準備は整った。

「じゃ、全員私服に変更したな、それじゅ学園祭に突入だ！」

「「「やっぱりハイテンションだ」」」

颯の後ろ姿を見て微笑む仲間達、場所は学園に移る。

セルシオ学園に近づくうちに、平民やその子供、貴族が乗っていると推測される馬車など活気と喧噪に包まれている。

「活気あふれてていいな」

颯は目を細めて言う。文化祭とかの祭りはやはり笑顔が多いよな。周りの仲間は颯が穏やかなのを喜んでいいる。

しみじみ思いながら学園の門をくぐると

「学園祭パンフレットです！どうぞ！」

紺のフェルト生地の上着と波に合わせて青と白のストライプのロングスカートを着る笑顔の女生徒。

俺は間違っても制服好きの嗜好無いからな！兄貴だ兄貴！

「ありがとう」

人数分取ると颯は礼を言う。女生徒が立ち去ると

「さて、どこを見よう」

既に騎士3人には護衛は不要と言ってるので、自由に分かれる。

地理歴史、魔術、聖騎士特集、剣、銃器の歴史、弁論大会、フド

コト…

「よし、じゃあ聞こう…何がいい！！」

「聖騎士！「剣！」」

「地理歴史！弁論！」

「おお〜」

上は騎士3人、あとスフィアさん、剣に興奮してますね。

下は颯とサラ。

「上手く分かれたな、それじゃ見学終わったら宿屋に直接戻る。昼飯は各自判断で、以上解散！」

「了解！」

わっと目的地に散って行く…てかスフィアは興奮して待ちきれないのは分かるけど歩く速さは異常です。

「さて、俺達も行く……」

「?どうかなさいましたか?」

颯が言葉を不自然に打ち切り、サラが首を傾げる。

「いや、サラさんと2人で回ると今気付いて…」

そうだった…今サラさんと2人きり…今更気付いたよ。一気に緊張が高まる。

サラは少し驚いてから、クスクス笑い

「失礼な申し上げですが、ソウ様は時折抜けてますね」

「まあね…」

颯は苦笑する。サラの笑顔はやはりいいと思います。

「私はソウ様の側近でありメイドです。そこまで緊張なさらなくて  
も」

「そうだね。少し過剰だね…まあ努力してみる。それじゃ改めて、  
行くか」

「はい」

颯とサラはまず、歴史研究科に訪れる。

「うわぁ…」

一面歴史書、古書、地理書、看板には10000冊の歴史書資料館  
と書かれてある。

取りあえずライトフィナルの図会とかあるかな…。

「ソウ様、ありました。これが最新かと」

「何か薄いんだが…」

改訂版領地図会シリーズ最終巻で6と書いてある。他のシリーズ5  
冊の3分の1の薄さ…、しかも何か目次を見ると、更に薄い部分…  
まさか…そこを開くと…

ライトフィナル

結構がつくりくるね。颯は何とか持ち直そうと、そのページを読む。

ライトフィナル

人口、約22万4千  
産業、農耕、材木、大理石、銃器製造他  
侯爵統治領

簡単にまとめたら1ページ：1ページかよっ？！

「あの〜」

「はい、何でしょうか？」

認めないぞ！ここまで資料が少ないなんて！まだ行かない地だが、これから自分が政治しなきゃいけない地がここまで寂しいデータとはさすがに颯も驚き、嘘だと願う。「ライトフィナルのデータって、これだけ？」

さつき呼んだ大人しそうな男子生徒に聞く

「えっ…あつ、はい。ライトフィナルは閉鎖的な部分がありますので…旅人や学園卒業生のレポートも皆無です…」

あう…颯は結構なダメージを負う。しかし生徒は続ける。

「ああ、でもライトフィナルの騎士貴族、セルドリック伯爵とハリ子爵は有名で、特に次期セルドリック伯爵家後継者の女性騎士、スフィア・セルドリック様は大人気で、確か…あつた」  
騎士貴族家系図鑑が置かれる。颯が覗くと、驚愕した。

セルドリック、ハリ 両家共にかんりの情報量、特にソニックも10ページかけて紹介されてるが、スフィアに至っては20ページに及ぶ。だが両人大半は製作者の私情が挟まりまくりで、いかに心酔して崇拜してるかがうかがえる。

「騎士科と歴史科の生徒の合作で、国とかからは非公認です。あと、スフィア様、ソニック様兩人、あまり表に出ないので、顔はあまり知られてませんし、この説明文も気合いと想像も数割…」

「ははは、熱心だね」

世の中やはりオタクというものは居るんだな。

「じゃあもしもの話だよ？もしもスフィア様、ソニック様がこの学園に居たら？」

「パニックを通り越して狂乱の可能性があります」

「ああ、そうなの」

スフィアさんが必死に身分隠したがってたのは自意識過剰かなと思  
った節もあったけど……ガチなんだ。

「色々教えてくれてありがと、それじゃ」

「はい！明日の最終日か来年も是非お越し下さい！」  
最後は笑顔で言ってくれる。

随分礼儀正しく、清々しい。これで貴族の家筋だったら凄いな…

「サラさ…！」

「既に居ます。ソウ様」

そう思いながら、本を読んでたサラを呼ぼうとして、背後に既に立  
っていた。

「いつから…！」

「メイドたるもの、主人が移動する時には素早く後ろに」  
常識とばかりに言うサラ。

「そ…そうか、ここにまだ用事は？」

「もうありません、弁論会場に行きましょう」

「ん、じゃあ行くか」

颯とサラは弁論大会会場に行く。

その後ろで、もてない男子諸子が

「美女メイド引き連れて…爆発しろ！」

と不条理な私怨の念を送っていた。

弁論大会会場の講堂では、数百人の生徒や外部の有力者が椅子に座  
り、壇上の発表者を見て静聴し、物好きな平民や、椅子が確保出来  
なかった貴族は側面二階の立ち見場で聞いている。

弁論は一人持ち時間20分、人を傷つけないなら武器も魔術も弁論  
道具として使用可能の何でもあり。

6、7年生にとってはこの弁論大会は、将来の官僚候補の為に通らなければならぬ関門と言っても過言でない。

「どう？王城から派遣されてる勧誘員の人が分かる？」

「あ、はい、一応は…前列から6列目の私達から見て手前から4番目に居る方は外交庁の筆頭外交官、その隣には民部院税収管理文官長、他には…」

サラが指していく所に目を向けると、確かに熱心にペンを動かす人達。鬼気迫るものを感じる。

「最後は王立正規軍の兵站総司令…私に分かる範囲ではこれ位です」「十二分分かった。ありがとう」

颯が礼を言つと、サラは少し嬉しそうな顔をする。しかも自然と上目遣い。結構効きますよはい。

弁論内容は、財務や国のあり方。

正規軍と常備軍を一元化案もあれば、王立正規軍を縮小して領常備軍中心にする軍事論。

二大帝国との付き合い方。

意外と北の災厄については皆触れない。いや触れないのが暗黙のルールか？

各専門分野に弁論者は触れると、またその分野専門の役人のペンのスピードが早くなるのには少し笑った。

そして、一番すげーと感心したのは、

スパシスという、元の世界で言えば、辛口カレシに、サシという醤油みたいなものをかけるか、ランという卵を入れて混ぜるかどちらが美味しいかという弁論。

最初は誰もが馬鹿にしてた雰囲気があったが、時間が経つにつれて、味覚の研究もされたかなり真面目な奴だと分かり、最後は皆あまりの美味しさアピールが上手すぎて口の中が唾液で一杯になるか、腹

が一気に減る人が続出した。  
ちなみに俺は腹が空いたよ。

「サラさん、お昼食へに行く？それともまだ見てる？」

「あっ…はい、お供します、十分見れました」

颯が言くと、サラはすぐに後ろにつく。

「次は飲食店巡りだな」

取りあえずスパシスにランを混ぜて食べてみよう

あと、保存食ばかり塩辛いのを続けて食べて山の中の果物も柑橘類が多かったので、珍しく純粋に甘いものが欲しい。

この世界にはどんな物があるか…

それは想像を絶するものだった。

飲食店ではスパシスを頼みランをかけて食べた。何もかけないよりは辛みが少なくなり、味がマイルドになった。

ちなみにサラも実はあのスパシス演説にやられてて、彼女はサシをかけて食べてた。

次に2人とも甘いのを欲してたので、探してたら…

「これは…なに？」

「わ…分かりません」

甘いものを売る店で一番甘いものと頼んだら

大丈夫ですかと店員に聞かれ

大丈夫と颯は答えた

それは後悔の始まり

目の前にあるのは赤い実を薄く切り、その一片をコヒ みたいな液体「ブラツチエと言っらしい」に入れると、それは溶けて消えた。あとは店員さんがよ くかき混ぜてくれて差し出してくれたが。何？その本当に飲むのみたいな目は？！

それ以上気になるのは赤い実の名前

ツング・ツアアシユテ ルング「舌破壊」

「まあ、百聞は一見にしかずならぬ一飲にしかず…行くぞ」

「は…はい」

変に緊張した雰囲気になる。そして同時にその液体を飲んだ

刹那

「くくくくくくく?!?!?」

声にならず、ただただ口の中が悲鳴を上げる。

口の中や舌で味わうなんてソムリエの真似事も出来ず、だからといって喉の奥、食道も通るのも本能的に拒絶する。

それだけ予想を遥かに越えて甘いのだ。

さすが舌破壊の実!

颯は一気に飲み下す。喉の奥が熱い。涼しいのに変な汗をかいた。と…

「サ…サラさん大丈夫?」

颯がサラを見ると彼女も苦い顔をしながら、必死に喉奥に押し込んでいた。

コクコクと口の中の分を全て飲み込むと、途端に涼しい顔に戻り

「大丈夫です、ソウ様こそ、大丈夫ですか?」

と、自分のことは一言で済まし、逆に気遣う。

プロッてすげえ、颯は素直に感心した。

その時

「これを飲み込む人を初めて見ました」

颯達の目の前には、この学園の制服を着た眼鏡の女性。しかし顔立ちは上の部類に入るか入らないかだが、出る所は出て、出ない所は出てないプロポーシヨンが凄い人だ。

「それはどうゆう事?」

「今まで甘党の人が多数挑戦して、一口も飲めずに吐き出してまし

たので」

にこりと言う……まさか…

「ずっと見てた？」

「ええ、知らずに食べているカップルを見るのも好き」「主従です」「カップルにしか見えないです」

はつきり言う女子生徒にサラはグツと言葉に詰まり、俯く。

「あなたは？」

「セルシオ学園魔術科8年生、セルティリア・ミル・テ　ゼです！」

「テ　ゼ公爵家！」

サラは驚きを隠せない、颯は…空を向いていた。

テ　ゼ公爵家、この王国では5大貴族家の一つで、王宮直轄で最大の文官公爵家…しかし現当主は子供が非常に多い為、第何子か分からない。

「メイドさんは驚いているみたいですけど、そちらのお兄さんは上のそ…あのトンビみたいな鳥は……おお、来た」えっ……」

「…！、激震と恵みの地よ、我に集いて盾となれ！」

サラは印を組み短縮詠唱で大きな岩と土を圧縮して固めた壁を展開、突っ込んで来た鳥は激突して首の骨が砕けて即死する。

「ヴァルプス、急降下突進で目標を補食または突き殺す鳥です！」

「ほぐ、で、あれは？」

上を見れば、2体の飛行竜と1体の巨大鷲。

「ワイバ　ンとヴァルチャ　！」

「あ　ワイバ　ンから数体落ちてきた」

ワイバ　ンから4体の棍棒を持った緑の奴と2体の剣と防具を纏った武装動物。

「ゴブリンとサ　ベルサラ　ですね」

「サラさん、魔術で敵を閉じこめられる？」

「魔法陣を敷くので時間が…ソウ様は武器が無いのに…」

「安心しろ…」

颯はにやりとして拳を握り締め、辺りに一瞬にして殺気に包まれる

「ガチの殴り合いは負けねえからな！」

「えっ…くっ！」

颯は駆け出し思いつき殴る。ゴブリンは吹き飛ぶ。

「いつてえ〜」

やはり毎日格闘訓練しないと拳がにぶ…

「よっ！」

サベルサラの剣が颯に向かい突かれ、それを左によけると

「思考のじゃますんな！！」

剣を持つ腕に全体重をかけてひねり

ゴキリ…

「ビヤアアア！！」

骨を砕き、サベルサラは喉から強烈な悲鳴を上げる。

「ウルフみたいにまとまって来ないから楽だな〜、よし、貴様ら来い！！」

颯は叫ぶとゴブリン達に突っ込んだ。

セルティリア side

セルティリアは目の前の風景に立ち尽くした。というより没頭していた。

なに、あの男女関係、おいしすぎる！！

格闘で一对多数をしている男性、並みの正規軍、常備軍兵士よりも錬度が高く、避けては殴り、蹴り、隙あらば得物を持つ腕を粉碎して無力化する。

しかし打撃だけではあいつらは何とかならない。しかも大鳥類下位魔物でも、頭脳があり、剣かマスケットなどの武器が無ければ仕留められない。

しかし彼は周りに人的被害を起こさせず、そして戦っている。

メイドの女も、一対多数、いつこちらに攻撃が流れてもおかしくないのに、平然と魔法陣を書いている。

そして彼女は恐れてない。戦い始めに何か言おうとしたが、いざ始めれば彼を信じて周りに何も無いような雰囲気で一心不乱に書いている。

ゾクリ…

甘美なる気持ちでセルティリアに走る。

そう！この主従でもなく、恋仲でも無く、ただただこんな恐れなしの信頼関係を観察したかった！どうしてこんな信頼関係になりえたのか！今後どうなるか！見たい聞きたい知りたい！

セルティリアは公爵家では四女、20子中12子目だった。

末っ子でもなく、長男長女の跡継ぎ候補でも無く。年子で国王に気に入られる程の逸材を持った9男に家族の目は奪われ、愛情は与えられず、影となった。

しかし文官と魔術回路を埋められてからの魔術の才は目覚め、セルシオ学園歴代で一番の実力者として注目を集めたが……この通り異常なまでの人間観察を生き甲斐とするセルティリアは気味悪がられ、敬遠され、また実家からも放置され気味で、どこに行こうが勝手にしろ状態だった。

メイドが魔法陣を描き終えて印を組み術を唱え始めた。ここからは発動させるまで完全無防備、こんな場所では自殺行為、でもするなんて！

逃げない、最後の一瞬までこの劇を見ようと決断した刹那

「くろう！サラさん！」

男性がゴブリンに阻まれている内にメイドに向かってヴァルチャ突撃！

メイドには意識はあるから術は強制解除出来るが、したら魔法陣からやり直し…さあ、どうする？！

セルテイリアは目を見開いて最後まで見ようとして…確かに見た。

メイドが確信したように笑みを浮かべたのを

そして

「チエスト　…！」

我が学園の緊急時騎士科が使用する無骨な大剣がヴァルチャの首を落とした。

落としたのは、足が少し見えるスカートを履く、凜とした女性、衣装が違えば女騎士とも言える。

「スフィアさん！ナイス！」

スフィア…まさかあの…

「ソウ様！後でじっくりお話が！」

「了解です…！」

男性：ソウと呼ばれた男は増援で来た顔がいい速攻男と、騎士とも言える動きをする男にゴブリンを任せていた。

そしてサラと呼ばれたメイドは立ち上がり

「敵を閉じ込めました！あとは御自由に！」

「よしっ！いくぞ！」

「グラ　シヨン・セルドリック騎士伯爵一子にして筆頭騎士、スフィア・セルドリック！いざ！」

「シカ　ハリー騎士子爵一子にして筆頭騎士、ソニック・ハリー…死ぬ」

今までとは尋常でない殺気が辺りを包み、そして戦いは一瞬でつき、周辺はゴブリンの血の海になった。

戦いが終わると、スフィアはソウに増援来るまで無茶しないでと懇願してて、周りは苦笑してた。それ以上に



の国、または大陸の情勢を動かせるポストを蹴り…

ライトフィナ ルー等文官に入官する…。

## 陰謀が渦巻き

颯が学園祭で襲撃された翌日

王都王城練兵場

王城の裏側に各院庁と王城の面積に相当する総合大規模練兵場。武人であった初代国王が錬度を高める為に造営され、毎年必ず旅団単位で入れ替わり一週間、王立正規軍兵士、事務員全員この場所で大規模訓練をする。

その中で一番土地が大きい練兵場で、

「しっ…死ぬっ!!」

「安心しな!お前の防具なら木刀程度で死なないよ!」

「いや!」

木刀の打ち合う音がなりひび…かず、完全にボコボコにされている。勇者稔と従者スノ。ザの剣術訓練は、常にワンサイドゲーム、周りで訓練している騎士や王都守備軍兵士はカタカタ震えている。

「ふう、すつきり」

「こっちは大惨事だよ!」

スノ。ザは本当に清々しい表情を浮かべ、稔はぐったり仰向けになりながら大の字で叫ぶ。

「そんな挑発的な格好したらスノ。ザ姉ちゃんにやられちゃう勇者様?」

「うんうん」

「大丈夫だリ。ネ姉妹!既に境地に達してい「じゃあトドメ刺そうか?」やめて…」

心配してくれているのは、メルシャン一族に次いで伝統のある、東の大国ブランティア帝国の魔術師で、弱冠14歳で最高位を手に入れた、メニアス・リ。ネ、ナミル・リ。ネ双子姉妹である。

元から公式で世界初の姉妹祝福の体質で、ミアスは多様の詠唱魔術、リネは膨大な魔力と魔法陣のエキスパートの為、リネが共鳴の魔法陣を敷いて、ミアスは共鳴でリネから供給された魔力を利用した強力な詠唱魔術で敵を倒す。

「たく、ミノル、お前の弟はセルシオ学園でゴブリンやらサベルサラと殴り合いして活躍したのに……」

「あいつと比べるな。元の世界で軍人してた奴と」

「てかあいつ！学園祭なんて羨ましいイベントに参加しやがって！学校の制服万歳の自分が見に行きたいわ！！」

声に出したら引かれるので心の中に留める。

てか……

弟の颯は中学卒業までは少し運動神経が良かった方、はっきり言って俺よりか弱かったのに……少年工科大学卒業してからは変わったように強くなつてたよ……

「そう言ってもミノル、体力も反射神経も異常に高いのに避けられないよな」

「スノザ、それはあんたが強すぎるからだ」

スノザは甲冑兜のガチガチでなく、むしろジャケットとズボンという超軽装。

しかし彼女は、平民学校卒業してから王立正規軍入隊。それからは実力と戦闘時の思考が異常に高いことから出世していき……

王立正規軍最精鋭、シルフィド騎士団団長に登りつめた女性だ。

シルフィドとは風の妖精、その名に恥じぬ風のように即応と味方からは女神が遣わし妖精に見える事からだ。

彼女が戦場に居れば、残るのは味方のみと言われる程の敵からは恐怖にしかない対象である。

いくら稔がチトを持っていようと、駆使しなければ宝の持ち腐れ、更にはスノザとの格の違いだ。戦闘の経験も、人を殺す経験も……

「まっ、少しはまともな動きが出来るようになったのは褒めてやるよ」

な…なんだと、スノ ザが手を差し出すだと？しかし仰向けで見ると、前屈みで手を差し出す美女、ナイスアングル！しかし確か前、同じシチュエーションでスノ ザに思いっきり腕を捻られた。と思いながら、稔は恐る恐る手を出すと、掴まれて…引き上げられた。

「あれっ?!」

「うん?どうしたの?」

「いやいや!…」

前の時腕捻りしたから警戒したたる!

と、言い掛けて止まった。

スノ ザの楽しそうな笑顔に、そんな文句も忘れて見とれる。

くそ…

「やはり適わないよ」

「なにが?」

「何でもだよ…この小悪魔」

「悪魔?ミノルは時々不思議な事を言う」

「分からなくていいさ」

稔は立ち上がり、小首傾げるスノ ザに向けて小さく笑った。

そんな姿を眺める人

王城第宰相室

窓越しからは練兵場が見え、そして稔とスノ ザを見て。

「くくく…、あれでくっついたら絶対勇者が尻に敷かれるな」

「ナルシャン様、覗き見はいけませんよ」

「いいじゃんか、ニミッツさん」

ナルシャンがにやにやして、黒髪黒目のメイドのニミッツ・シユガが苦笑して窺める。

彼女は、サラと同じのナルシャン専属メイド。

辛い生い立ちのあるサラと境遇が似ており、彼女は幼い頃からとあ

る小国の暗殺兵…確かニンジャとして育てられ、全身凶器の格闘術と暗殺術、ナイフさばきを習得していた。

話上関係無いので詳細は割愛するが、とある事件がきっかけで、宰相就任以前からのナルシヤンの専属メイドになる。

たまたまサラを保護目的で専属に採用したら、サラと彼女はすぐに打ち解け仲良くなった。当然サラの生い立ちも知っている。

今じゃ、サラが颯の専属メイドに送ってからはまた彼女1人になった。

ちなみにメイド採用しようかと聞くと、大丈夫ですと言われるので、当分は1人のメイドだけだ。

「さて、そろそろかな」

昼食後と言われてたからそろそろある人物がやってくる。

「ナルシヤン様…」

訪問する相手を知っているの、ニミッツの顔が険しくなる

「大丈夫だ。こちらにも色々用意している。簡単に消される事はない」

「そんな事させません、私を護衛に」

「駄目だ、俺はまだ要職にあるが、君は…」

「確かに奴らは非法法手段を行使します。しかし…」

ふっ、と彼女は微笑み

「親友を苦しめた悪女の面を拝みたいので、護衛も含めて。自分の身は自分で守れます」

自信満々に言うと、ナルシヤンは笑い

「ハハッ！サラになるとドライな性格が消えるな！」

「…からかわないでください、唯一無二の心から語り合える友を心配して何が悪いんですか」

珍しく口を尖らせて抗議するニミッツ

「あれ？俺は友達じゃないの？」

「ナルシヤン様は……」

次の瞬間、扉がノックされる。

「どうぞ」

ナルシヤンは左手で話は後でのサインと、サムズアップして護衛を頼むとサインをする。

ニミッツは無言で頷き、すつと下がる。扉が開かれる。

最初に現れたのは金髪で顔が整った黒服の男性、そして後ろから

「お待ちしておりました、サ チェ様、どうぞこちらへ」  
ナルシヤンが恭しく礼をする。

サ チェ・メルシヤン、隠し子のサラを迫害した張本人。

三十代後半と思えぬ美貌を持つサ チェは派手な服と装飾を揺らし無言で差し出したソファに座る。

王国でも聖十字教会でも超高位だから返礼の必要無しか。

ナルシヤンは表面上の笑みだけ浮かべ、サ チェと対になるソファに座る。ニミッツは無言で茶を差し出す。

「それで、メルシヤンの高位の方がこんなしがない宰相に何の御用でしょう」

「白々しい、あなたの所について最近まで居た、クリス・サラン……いえ、ここではサラ・メルシヤンと本名で名乗ってたそうね」

いきなり先制攻撃、ニミッツや颯など、絶対に信頼出来る人以外にはサラの名前を出してない。彼らがバラすわけない。

「大した情報網ですな、さすがです」

「あら…あっさり認めるのね、「改革宰相」と呼ばれる手腕はどこに行ったのかしら？」

明らかに見下す言葉、ニミッツは怒りで思わず仕込み武器に手を触れそうになる。

ナルシヤンは変わらず

「そんな大層な名前が貰える程働いていませんよ……、それで、辞めて居なくなつた彼女の元主君に会ってどうだと？」

あくまで穏やかに聞くが、対照にサ チェは

「飄々としてられるのは今の内よ、あなたは、聖十字教会でメルシ

ヤン一族本家と神の使い神託司祭との謁見が出来る聖職の司祭でありながら、異端でメルシヤンの面汚しのあの女を匿い、しかもそればかりか魔術が使用可能のを知って野放しにした……これで技術漏洩が起きたら最悪な展開になる。あなたは然るべき処罰を受けるべきです」

あくまで冷静を装いながらも、内面は怒りで埋め尽くされたサチエが言い切る。

しかし、ここで黙ってないのがナルシヤン、ここから反撃だ。

「ここ、宰相というのは、このサベルレピア国内の情報がたくさん集まるんですよ」

「話の意図が掴めませんわ、それとも私をおちよくってるのかしら？」

ナルシヤンがいきなり切り出す、サチエの顔は険しくなる。

「いえいえ、決してそのような事は……ただ、その情報に目を通すと凄く楽しい事実が！」

「？、楽しい事実？」

「ええ、まあ聞いて下さい、つい3日前、東部の王立正規軍山岳要塞の物質輸送用に調教されたワイバングが2体、魔導院からの要請で王立軍院の正規軍本部の許可無しに貸し出されているんです。更に、偶然、輸送用ワイバングと見抜ける人物が、セルシオ学園上空を飛行してるのが目撃されているのです」

「……………」

ナルシヤンの言葉に、サチエは固まる。メルシヤンに忠誠を誓った者を使者にたてて、山岳要塞司令には金を積んで正規軍本部には報告させてない。情報が漏れるはずが……

ナルシヤンはニコニコしながら

「更に驚いたのは、そのワイバンの背中には対災厄で、魔獣も国家防衛戦力の一つとして開発された魔術「洗脳」を施されていたゴブリン、サベルサラ、更にヴァルチャまで参戦してたとか、しかもその参戦してたのは、兵士の格好する者以外は敵味方無差別

に武力を行使する失敗品で既に廃棄されてるはずなんですがね」  
ナルシヤンはさらりと出したが、サ チエ、そして後ろに居る黒服の男の眉も微かに動き、動揺を表している。

洗脳はナルシヤンが知っているはずかない極秘作戦。

3年前の災厄征討戦争で、参戦した兵士の約9割が戦死か復帰不可能な病傷、精神崩壊を起こしているのを目の当たりにしたサ ベルレピアは、国王と、五大貴族、そしてメルシヤン一族分家で国内外完全極秘で進めた計画、それが「魔獣戦力補完計画」、災厄が魔獣を僕にするならこちらも…と。

しかし絶対にナルシヤン含めて聖十字教会にバレてはいけなかった、なぜなら…

「聖十字聖典第2章の2項、万物現世に生を頂いた者は、神からの授かりものとして感謝し、例え魔獣でもその者の意に反する人形のごとく操る、または不当に生命を弄ばず、…聖十字教会の教えを聖十字教会トップに近いメルシヤン一族が破るなんて…聖典違反は死罪に近い拷問と監禁というのに」

考える前にナルシヤンがすらすらと言う。聖十字教会職員関係者はどんなに階級が高かろう低かろうとも、聖典違反は等しく即重罪である

サ チエは動揺を隠し

「大した情報網ね」

「お誉め頂き至極光栄、しかし…もう少し穏便に事が運べなかったのですか？」

「何の事かしら？」

サ チエはあくまでしらを切るが、ナルシヤンは確信していた。

学園襲撃の一連の事件はサラを快く思わないサ チエ筆頭のメルシヤン分家の人間の犯行だと。

「まあこれで、私がサラを匿っていたという事実よりも重大な事案をあなた方は行った」

「教会に通報するのかしら？」

サ チェはまだ余裕の笑みを見せる。ナルシヤンはフツと笑い

「それをしても替え玉や、通報する内容を権力でねじ伏せられてしまふ可能性もありますし、この王国に居るメルシヤン分家の災厄の魔巢と同じくらい黒い部分の少しも削れない。だからこれは私の命の御守りとして、あなたがたがサラを匿ってたのを告発するか、私が死ぬか行方不明になったと同時に告発出来るようにして、そして私は……」

ナルシヤンは目だけ動かしてニミッツに合図する。彼女は黙ってさりげなく前で重ねてた手を横に置く。

「私は一夜の間違いから生まれた子を軟禁まがいにして、放り出して拳げ句抹殺するために聖典の教えを破った方法で下手すれば学園祭という混雑した場所で未来ある子供や学生、平民に下手すれば無差別の血の海に様変わりの残酷な方法を採用しながら、のうのうと信者からのお布施で贅沢して王国を巣くう……そんなお前ら分家を叩き潰す！」

ナルシヤンの宣戦布告の言葉が言い切った刹那

キン！

鉄と鉄が奏でる音。

黒服の男が袖に隠していた毒針をニミッツはスカートに隠しポケットに入れていた短刀で弾く。間違いなくナルシヤンに向けて放っていた。

見目に反してあの男は沸点が低い、勝手にやった証拠に

「ハウズ！やめなさい！」

サ チェは思いつきり動揺していた。

ハウズと呼ばれた男は、ハツとして

「誤射だ、申し訳ない」

と頭を下げる。

ニミッツが怒りの言葉を口から出す前に

「そうですか、そういうことにしときましよう」

ナルシヤンが言う。ニミッツはギョツとするが、主人がそう言うからにはこれ以上は何も言えない。

落ち着きを取り戻したサ チェは

「私達を潰す？面白い発言ね…」

立ち上がり、椅子に座るナルシヤン本当に見下しながら

「じよあ精々頑張りなさい。まあその時までには命があるか分からないけどね…メルシヤンサ ベルレピア分家を舐めないで頂戴」  
そして退室していく。

退室してからしばらくして

「は ……！終わった！」

ナルシヤンは背伸びしてから安堵の溜め息を漏らす。

ニミッツは不可解な表情で

「なんでナルシヤン様はさっかの暗殺未遂を黙認したのですか？あのくらいの敵なら直ぐに床を拝ませて憲兵隊に突き出せましたが…」  
「ん？ああ、まああの位でカッパしてたらあの化け物達に勝てないし、それに…」

「それに？」

ナルシヤンは笑って

「ニミッツさんが守ってくれるでしょ？」

「なっ…お…男が女に守られるのはおかしいかと」

「ちがいない！」

あわあわするニミッツ、ドライな感じも形無しで、それを見て笑うナルシヤン…

「そういえば、さっきサラさんは唯一無二の友、じゃあ俺は？」

唐突に聞く。ニミッツは微笑み、平手を胸に置き、

「ナルシヤン様は私が命を賭しても守るに値する存在、この喧嘩の間、絶対に守り抜きます」

「それはありがたい、そうしてくれたらこの喧嘩もしやすくなって、サラさんにいい報告出来る」

そしてナルシヤンは誰にも聞こえない小声で

「教会から下された任務でもいい報告出来る…」

ナルシヤンの部屋を退出した後、サ チエは

「クツ…忌々しい！」

「落ち着いて下さい」

黒服の男、ハウズ・バニアがサ チエを宥める。

ハウズは、メルシヤンのサ ベルレピア分家の人間を代々体を張って警護して支える第一従者一族、バニア家の1人だ。年が18なので、本当はサ チエの息子に付くはずが、彼女の元従者でハウズの叔父が病気で現役引退したので今は彼女のお気に入りハウズが担当だ。

「あれが改革宰相…正直見くびっていた」

宰相には権力が無い…とナルシヤンはいつも言うが、本当に何も無かったのである。

一応は公共事業、議会の法案の執行許可は宰相の認可印というものがあるが、イエスマンじゃなかったら即更迭、反論する日には元々の肩書きも無くなる、そんな悲しい役職だった。

しかしナルシヤンは違った。

聖十字教会の司祭ということで、信仰に篤い貴族に根回しして簡単には失脚させないようにして、王族からは王都守備軍の指揮権は宰相が引き継ぐシステムを確立。外交からは国内外商人隊の入国管理などと、たった2年で政治の重要職を掌握していつている。そして最近では魔導院の特権も平等の名の下弱体化「客観的に見れば行きすぎた魔術師越権の正常化」している。本当に忌々しい。

確かに計画はサラがライトフィナルに入る前に仕留めようと計画に杜撰な部分があるのは認めるが、情報は宰相なんかに行くはずない、特に洗脳の魔術はまずい。しばらくは告発される心配は無いが、首謀者は私の夫いずれかは告発される可能性も…  
それよりも、

「あのナルシヤンの護衛、どう？私に恥ずかしい思いをさせたのだからそれは素晴らしい情報を得たわよね？」

「はい、もちろん。あの護衛メイド、彼女は一言で言えば…プロです」

ハウズの暗殺未遂に最初はサ チェは激しく動揺した。しかしナルシヤンの卓越した動きを見て彼女は即座に理解した。

ハウズは確かに仕込み毒針を飛ばし相手を殺す護身術を持っているが、逆を言えばそれしか無い、しかし彼はそれ以上の武器、それはずば抜けた洞察力である。

「プロ？」

「ええ、私が宰相の言葉に切れて激情のあまり咄嗟に仕込みで攻撃をした。その時メイドは瞬時に宰相の前に立ち仕込みを弾いた」

「それは見てたから私でも分かるわ」

「まあ話はそれから、私の仕込みは非常に薄く傍目からは分からない、かつバネを利用しているので対象に刺さるまで時間がかからない。しかし彼女は武器を見極め卓越した反射と身体能力で弾いた、しかも準備してたからといっても、凄く落ち着き淡々としていた。

多分宰相も私の仕込みに気づいていたはず。よほどの信頼関係なんでしょうね」

ハウズの言葉にサ チェは驚く。しかし同時に疑問に思う。

「そんな強いメイド、どこで調達したのかしら？」

「それは分かりません。しかし黒髪黒目、驚異的身体能力、ナイフさばき…多分彼女は傭兵は傭兵でも、最強の闇夜の暗殺兵、隠「いん」の国のシノビです」

「隠？あの大陸極東の極小国？」

サ チェは小首を傾げる。そこは…

「神を信じず、しかし聖十字教会に対立するわけもなく、ただ己の限界に挑戦した兵集団国家、高額報酬さえ払えば神でも同郷が護衛する人間も目標なら躊躇い無く殺す。任務に失敗すれば死のみの厳格な組織です」

ハウズが言い切る。

隠の国、勇者ミノルが使う不可思議な文字、カンジというものを使う国。国というよりも、部族の里で、地図には最高倍率の拡大鏡を使用しないと見えない。

「しかし、さっきの話と矛盾するわ」  
サ チェが切り出す

「隠の国は確かに護衛を頼めば雇えるけど、1日の貸し出しでもかなりの費用がかかると聞く」

「まさしくそこですサ チェ様。サラのメイド経歴と同時に彼女の経歴を調べましたが、そこには約3年前から専属として働いているという記載がありました。ここまで毎日お金を払ったら宰相は司祭いえども簡単に破産します。つまり彼女はメイドとしての給金以外貰っていない。しかし任務なら必ず隠の国、メイドに報酬を払わないといけない」

「何か裏があると言いたいのか？」

「あくまで彼女がシノビであるという仮定の話ですが、今後宰相と戦うにあたり彼女の攻撃も避けられません。調べる価値はあります」

「…、分かったわ。ただしナルシヤンの情報網は今回の堅いと確信した、同じ家の奴はまたへまする可能性があるけど、あなたなら大丈夫と思うけど一層の注意と隠密を」

「大任頂き至極光栄…それで」  
ハウズは目を細め

「計画は……」

「既に第一段階が失敗した時点で自動的に第二段階になる。金さえ積みれば戦う征討戦争の残党で傭兵に落ちた奴ら。でも実力は激戦帰りで折り紙付き、数もそれなり」

「しかし大陸随一の騎士と、勇者弟で聖騎士のソウ様も居ます。やるのでしょいか？」

ハウズの問いにサ チェはニヤリとして

「やれなかつたらしばらくは大人しくして、ナルシヤンが別の事案

に囚われている内にまた考えればいい、私はあいつを殺すまで諦めないわ」

「凄いい執念ですね…一体どこから…」

「あなたが誇り高きメルシヤンの第一従者一族なら察しない！」

「了解です」

ハウズは言うが、既にサ チェがサラを殺すにこだわる理由は推測出来ていた。

彼女は誰よりも一族を誇り高く思い、忠誠を誓って、主に攻撃の高  
等魔術が使えるが、基礎に忠実で、回復、攻撃、防御、補助の基礎  
の全てを熟知している。

更にお布施を余り使わず、ハウズに調査を任せるように従者にも信  
頼を置き、近しい従者側近からも慕われる。

あるいみ女好きで上に流されてしまい「洗脳」の魔術を作ってしまった  
うサ チェの夫よりもメルシヤン分家当主をしてみらいたい一本気  
のある才女だ。

しかしそんな駄目当主に惚れ込み、随分先行き不安な生意気な息子  
達に甘いのも事実で、更にはメルシヤンの面汚しと呼ばれたサラを  
徹底排除する偏った思考がある為満点とは言えないので、彼女の評  
判が悪いのも事実だ。

しかしハウズは信じている。サ チェ様は今の腐り始めたメルシヤ  
ンサ ベルレピア分家を改革する力があると。だから今、サラを殺  
した罪が露呈して失脚するなんて馬鹿げた事態にはなって欲しくな  
い。失敗を願っている。

いや、願わなくても、サ チェの代理の依頼役はハウズの思想賛同  
者で傭兵にはサラ単独で旅してるといふ誤情報を与え、学園襲撃が  
失敗した時も誤情報を与えた。

勇者弟も居るといふ話も伏せて。

あとは山賊達から「紅き死神」と呼ばれる人物が居る時点で失敗確  
定、しばらく計画が先延ばしになる。

それまでにサ チエ様を目覚めさせ、分家を掌握して宰相は好きなだけ黒い部分を削らせるが、良識派と新体制に必要な人材を破壊されないように工作する。

壮大だが、既に従者工作員によって計画されている。

「やらなきゃな…」

「何を？」

「色々喧嘩に必要な事です」

「そう」

サ チエは大して気にしてないようですぐに前を向く。

ハウズは誓っている。バニア家長男でありながら身体能力が低く護衛の側近にはなれないと馬鹿にされたのを、サ チエは洞察力を高く評価してくれて可愛がってくれた。

だからやってやる。今こそ恩返しの時、自分が一生で一番輝ける時間。

この国を災厄から守り、サラを生かし、そしてサ チエを守りひいては分家を直す…。

まだ若い青年と、陰で動く改革派が活発になっていく。

そして戻って颯side

ベルグラントでは散々だった。

学園では素晴らしい連携プレーで包囲され、脱出した後は何とか宿に戻れて、学生も追って来なかったので一安心。

と思っていた時も私達にありました。

翌朝、日の出ぬ内に既衆から愛馬を回収して都市から出ようとしたら、今度は都市の管理局の兵士が自分達を学園で見たらしく、賛辞と握手の嵐、さらにはわざわざ昨日の事件についての捜査内容と、

不審な上からの圧力で中止になったとの愚痴を聞き、出た時には太陽が昇っていた。

で、時間短縮と訓練の為、都市から出て一時間もしないライトフィナルへの近道の側道の森に入って数分

「山賊とは思えない錬度高い集団に包囲されるのでした」

「見事な状況説明ありがとうございます。が、誰に語りかけを？」

馬に乗る颯が語り、馬から飛び降りたスフィアが大剣を構えながら聞く。

「ん？シヨ トカットした分を総括しようとして作者のいこ」「メタ発言禁止！」「」

スコット、ハリ からツッコミ。

「メタ発言？作者？」

「ああ、別に知らない方がいいよ」

小首傾げるサラに颯が言う。

「さつきから何ごちやごちや言ってんだ！」

敵のリダらしき男が叫ぶ。

「あゝ、済まん。で、どちら様？目的は？」

颯は聞きながら周囲を目だけで見渡す。

剣が6、マスケットが4…か。しかも銃は対角線上に味方が居ないよう工夫された制圧射撃位置。こいつら中世ナポレオン時代に存在した猟兵と呼ばれるものか？

そして目的は何となく察せて、サラの周りに集まる。

「俺らはその青髪の姉ちゃんさえ大人しく引き渡してくれりゃ見逃すんだが」

「それは断ります」

「なんだと？」

下卑た笑みを浮かべる敵にスフィアが即答、そして

「あなたたち傭兵なんかには負けませんから」

「ふざけやがって…貴様ら死ね…」

「お前がな」

刹那、リダの右横の男が腕を振り上げた…が、間合いに一瞬にして入ったスフィアの大剣が下段から上に、男がまるで骨や筋など堅い部分が無いようにあっさりとは断される。

吹き出る返り血、浴びる彼女、そして…笑った。

「フフ…フフ…この感じ、この生暖かい液体…」

「ああ、トランス状態に…」

「何がどうした？」

ハリが遠い目をして颯が聞く

「あいつは9歳の頃に志願して、ライトフィナルに居着いてた山賊の山狩りに参戦したんです。そしたら初戦で返り血を大量に浴びてから人が変わったように…そして表は白き愛国者、しかし白い鎧の本当の理由は血を目立たせるため、だから山賊達からは紅き死神と呼ばれてます」

ああ…スフィアさんって…

「これでも食らえ！」

敵の1人が恐怖から脱し銃を発砲するが、いとも簡単に大剣で弾かれる。

「ふふつ、グラ レム鋼の剣にそんな飛び道具が効かないわ！」

「に…逃げる！逃げるんだ！」

リダが叫び動けない兵をおいた薄情な兵士達は逃げ出す。征討戦争経験で錬度は高いが、恐怖や不利を感じると逃げ出すようになった。

「ソウ様、どうします？」

聞いているけど皆さん目をギラギラさせてます。

「じゃっ、下に降りて悪さされても困るから、追撃！サラさんはここで待ってる！」

「了解！」

馬で追撃を開始する。

追いかけるとあっけなく颯はリダ 男を追い詰める。

「くそっ！」

「さくて、追い詰めたと。んで  
剣を構えて颯が聞く。」

「お前、このチムのリダだよな？誰に依頼された？」

「知るかよ！」

「そうか……」

颯は風の刃を作り、男の左腕を少し斬るが、血は派手に噴いた。

「ぐああああ？！」

「もう一度聞く。依頼人は誰だ？正直に答えれば手当して真つ当な裁判くらいは受けさせてやるよ」

「ぐうう、本当に知らないんだよ！ただ代理という奴が金と青髪の女を狙えとしか！くそっ！話が違う！」

「話が違う……とは？」

「単独だと聞いたんだよ！それが集団……しかも実力者集団とは……」

「ふん、ま……聞いた事は済んだし、じゃ「お前らライトフィナルに行くのか……」？ああ」

男はにやりとして

「あそこに行くのは止めた方がいいぜ……」「なぜ？」

男はここで致命的なミスをした。それが恩情が吹き飛ぶ事も

「あそこの次期領主は神の力を貰えなかった異世界の負け組で、役立たずの可能性がある勇者の為に金を出す地だと……さ。しかも、その力の無い方が実質的身体能力が高くて正直そね勇者が本当に強いか分からんだとさ！笑える話「黙れ」だよ、俺達が征討戦争よりかはつか「黙れ……」」

颯の口調に噤むどころか男は

「何だよ、お前は勇者支援派か？」

「まあ、そういう所かな…気が変わった」

言うなり颯は剣を構えて風が集まり小さな台風が出来る。事情を知らないのも関係ない。

「なっ…！話がちがっ」

「冥土の土産に一つ、俺を負け組とか言うのは構わないが、ライトフィナルと俺の兄貴…勇者を馬鹿にしたのは死んでもいいと思う。いや、サラさんを狙った時点で自制崩壊寸前だったけど…死ね」

男は声にならない叫びを上げる前に、小さな台風によって肉片として飛び散った。

返り血は自動防御の風で浴びない。罪悪感とか人を殺した恐怖も感じない。自分が軍人だからか又は命は軽いと心の中で思っているのか…

「ふう」

「お疲れ様です。ソウ様」

「いつから居た、ソニック」

ソニックは木の陰から出てくる

「敵を拷問してる時からです。私が追いかけた敵はすぐに仕留められましたので」

「……」

颯は一応男に黙祷を捧げてから

「自制出来ずにやってしまったが…」

「正直に申し上げますと、多分裁判の方が拷問もより激しくなりま  
すし、死刑は免れません。見たところ遺体の損壊は激しいですが即  
死なので、痛みも感じなかったでしょう。まあ私はライトフィナ  
ルとソウ様を侮辱した時点で殺そうと思いましたが」

「そうか…」

颯は元の世界の法律とは違い、現場で殺される方が楽という感覚に  
遠い目をした。

「さて、スフィアもスコットも戻っていると思います。ソウ様、行

きましよう」

「……、ああ」

颯は少し歩いてから後ろを向き小声で

「恨むなよ」

と呟いた。

瀬戸霧 颯、初めて人を殺した日、そして殺し合いをする日々の前兆でもあった。

陰謀が渦巻き（後書き）

次回からライトフィナル内政編！  
色々突飛な展開お許し下さい

辿り着いて（前書き）

かなり遅れて申し訳ありません！

話が少し突飛です…

## 辿り着いて

サラを狙った傭兵を全滅させてから三日目、最初は第2第3の刺客に颯達も警戒をしていたが襲撃も何も無く平穏な日々が過ぎた。

展開があつたのは四日目、裏道から正規の道に出ると1羽の白ハヤブサがサラの腕に止まる。

サラ曰くこのハヤブサはナルシャンが可愛がっているペットで、伝書的作用を果たす。

正規の道でなく時間短縮、対刺客で一目につかぬよう、そして魔獣を倒し、馬に慣れる超その場任せの訓練で裏道を使用した為に、ハヤブサは結構長い間探してくれたらしい。済まない、ハヤブサ。ちなみに名前は

そしてその子の足に付けてある丸めた手紙を開く文章はただ一言

「サラの敵は身内にあり、牽制をかけた」  
宰相からのその手紙で全てを理解する。

サラの敵はやはり縁を切った身内か。そして素早い対応のナルシャンに感謝しようとして……

「ん？」

紙の右下に触れと書いてある。颯が触れると

「おお！」

紙の文字が消えて新たな文字が浮かびあがる。颯が驚き、サラは冷静に

「これは対象の人物以外は何も無い白紙に見えて対象が触ると文字が浮き出る隠匿魔術です。しかも対象以外が触ると証拠隠滅の魔術を併用しているある意味高等です」

「技術の無駄遣いだな……」

苦笑しながら文面に目を走らせて……

「はあ……」

「ど……どうしたのですか？」

溜め息をつきながら颯はスフィアに紙を差し出す。

「え、ひと月後、ヘイアス自由国との交易路開通に伴い、大交易団を派遣。安全確保の為に正規軍、諸領常備連合軍を先行して護衛及び駐留する際の食料支援を命ずる…て、派兵と補給命令ですね、しかも拒否権無しの上命令です」

「てかヘイアスとは結局通商するんですね」

「というよりヘイアスとは…何？」

また出た新国家に颯が首を捻る。

「まあ、国家という枠組みに保護された闇国家というか…」

「闇？？」

スコットはどもり、颯はますます首を捻る。そこに

「聖十字聖典を信じず、自由の名の下裏の世界が表の世界を汚さな」という条件で跋扈させ、その非合法で富と最新技術が多いとされる超法規国家、それがヘイアスです」

「付け加えれば、昔から正規軍より傭兵から成り立つ私設軍も多く、いつ抗争や他国侵攻が無いかわりに緊張がある国です」

「そんな国があるのか…てか…聖十字教会を信仰しない国と何で交易？」

サラとソニツクの言葉に颯は単純な疑問、ベルグランドという教会大好き領地ある国なのに

「信仰と通商は関係ないですよ…」

スコットがしみじみと言う。

「昔から自給で交易率が低い南の諸国、東で、特に近年度々対立姿勢を示して不安定なブランティア帝国、そしてアルテリア高い交易収入はあっても、絶対的に人口が少なく、一定以上の収入が見込めない、そしてアルテリア法国は、シグラド帝国までの道を道聖域通行料と言う名の関税で値上げ。塩の輸入以外は交易がない。ならば高い収益が見込めて、我が国とはそりが合わなくても通商では不利な点が少なく、一応治安が安定していて、法国以外の西交易ルート開拓、帝国と新たな塩の道を視野に入ればヘイアスが一番い

いと商業貴族、組合が提案して強制採決されたみたいです」

「何か生々しいな…：てか、塩は輸入？」  
颯にとつては衝撃を受ける。

「この国は内陸で塩は大量生産で非常に安いシ　グラ　ドから全面輸入してますが…：他の国よりも関税でかなり損はしています。それでも他の塩よりも安いので輸入してますが…：」

ソニックが援護で言う。ふ　むと颯は唸った後

「やっぱり法国よりかはマシになるか分からないけど。帝国直通があつたら市場も拡大もしやすいよ…：て、皆さん？」

全員が何だか影を感じる。まさか…

「法国からは調子乗るな、王国からは田舎領地は勝手に法国刺激するな…：唯一の国境接するライトフィナ　ルは矛盾やわがままで大変です」

「へ…：へえ〜」

スフィアの珍しい遠い目で、颯も遠い目になった。

一行はまた旅に戻り、そして3日間…：「やけに早いのは突っ込まないで」

ライトフィナ　ルに続く唯一の道を渡り、一応ある砦、 그리스 砦は顔バスで通り過ぎ、そして

「やっと着きました。ここが我が領地、ライトフィナ　ルです」

「ここが…：か」

小高い場所から颯は見渡すと周りは山に囲まれ、目立つ物は無いから、北の領主を基点に太陽が星頼り。広大な土地の真ん中に大きな町が形成されており、周りは農地と農耕集落、しかし広い為更に更に周りは少し荒れている場所は酪農家や放牧もやっていると。川は小川を支流に小高い丘から川が流れているが領内に行き届いてないの、周りの山で清められた潤沢な地下水や湧水を利用している。他には家や集落が数多に散在し、山の中にはライトフィナ　ルと融和

した独自の民族や、契約した戦闘民族も居る。

「平和だな」

「それが最大の自慢であり誇りです」

颯がただ一言呟くと、ライトフィナルの騎士は微笑む。

「そしてここがソウ様の居住して執政を行う場所ですが……父上？」  
「親父？」

防備や領地を見渡せるよう小高い所に建てられた領主屋敷に案内しようとした時、屋敷の前には数人の人が屋敷前に立ち、その周りを数十人の人が囲む。そしてスフィアとソニック：今なんと？

「ん…おお！スフィア、戻ったのか！」

「ソニックも！となると、その若いのが」

2人の男性が近づいてくる。

「ただいま戻りました」

「領主を連れて来ました」

「おお…お初お目にかかります、スフィアの父にしてセルドリック家家長、グラ ション・セルドリックです」

「私も、ソニックの父にしてハリー家家長、ファバ・ハリーです」

スフィアとは逆でガタイのしっかりしているグラ ションとこれもまたソニックと逆で体が細くしかし雰囲気は武人そのものを感じさせるファバ。

「初めまして。代理領主に着任しましたソウ・セトギリです。未熟で無知な自分が務まるかどうか分かりませんがよろしく願いします。それで今は何が起きて「あなたが領主様か?!」はいい?!」いきなり迫り寄る老人、両手に持つのは銃。事情を知らないスフィア達は颯を守ろうと身構えて前に出ようとしかけた所だ。

「え…ええと…とりあえず銃を下げて下さい、それとあなたは…」

「おお！これは申し訳ない事を。私はシグラド帝国のしがなき数学学者で今は正式にここに永住しますハリス・エブラと申します。この度の不敬と、そして今失礼承知で領主様には是非ともこの銃を

見て頂きたい！彼らはこの銃の素晴らしさを何度申し上げても理解しない！」

ハリスは膝をついて献上する形で銃を差し出す。颯は受け取った瞬間に気づく。

「これは…後装式小銃…マスケットとは違いますね」

「お……おお！分かるのですか?!」

「こ…後装式？この弾を押し込むスティックの無い銃のことを指すのですか？」

グラ ションは首を傾げる。

「ええ、これはマスケットのように前から入れるのではなく、後ろの弾倉から弾を供給してレバーアクション「撃鉄」で弾の後ろの火薬を発火させて撃ち出す連発銃です」

元の世界の記憶が役に立ち饒舌になる颯。周りはポカンとして、そしてハリスと後ろにいる直訴しにきた人達、銃職人の人々は歓喜して

「素晴らしいっ！！さすが領主様！！」

「我々の工夫した点を見抜くとは！」

賞賛の嵐。しかし1人は違った。

「水を差すようで申し訳ないが、銃の中の刻みは何なんだ？一応射撃精度が良くなるというが、実際どのくらい良くなるんだ？」

ファ バ が聞く、予想通りあたりが沈黙し、ハリスが説明しようとして……

「すみませんがどこか銃撃てる場所ありますか？」

口を開くのは颯。ファ バ が

「この近くに射撃場は一応ありますが……」

「そこで私が実際に撃って証明しましょう。彼らがいかに凄いか、この銃の性能もあわせて」

「ほう」

「ソウ様?!大丈夫なのですか？」

心配してくれるサラ。颯は笑って

「安心しな…楽しい結果が待っている」

射撃場に着くと、皆は射程圏内の的から50m地点まで行くことするが、颯は

「ここから撃ちましょう」

「……?!」「」

約120m地点に立つ。

「そこからは弾は地面を掘るだけです」

グラ ションが当たり前というように言う。これはこの世界では正しい言い分だ。

余談だが、実際マスケツト銃の破壊力は現在最強と呼ばれしデザートイ グルや7.62mmの弾を使用したバトルライフルを遙かに凌ぐが、命中率は100m離れた所だとの的の地点では70cmも大きく逸れてしまい、結局マスケツト銃使用時代末期でも命中率はとにかく悪かった。数打ちや当たるを素で実践したのが戦列歩兵だ。

閑話休題

「まあ見て下さい。それと自分より後ろに居て下さい」

皆が後ろに下がるのを確認してから、颯は息を吸い、左足を前に重心をかけ、肩に銃床ストックを当て優しく銃身に頬付け、そして高めの視点アイ照準にする。

吸ってた息を吐き、一気に的に焦点を定め撃鉄をカチリと小気味の良い音を出して引く。レバーアクション

その姿は、武人であるセルドリック、ハリー親子には美しい剣舞のように感じ、銃職人、ハリスにはやってけると確信みたいなものを感じさせる。

そして

カチ…

引き金を引くと辺りに大きい音が響き渡り、そして一秒経たずに的が吹き飛ぶのが確認される。さっきまで正直馬鹿にしてた騎士達は

目を剥く。

「も一発」

ノってきた颯はまた撃鉄を引いて右横の的を目掛け撃ち…命中。  
こんどは左も命中。

更に更にと撃つてく内に気付いたら管状弾倉に収納されていた弾八  
発を撃ちつくしていた。

颯は弾が無くなると、振り返り

「これこそ刻み…私が居た世界では旋状ライフリングの真骨頂、命中精度の高さ  
です。これは速射性、命中性、軽量性、全てにおいて素晴らしいで  
すハリスさん」

「お、おお…ありがたきお言葉です」

「これは予想以上で、俺達の認識不足だった…申し訳ない」

グラ ション、ファ バ は貴族という驕りなく素直に非を認める。  
ハリスは感激する。

グラ ションは颯に近づき

「しかし銃の改良は条約違反では？」

と耳打ちする。確かにマスケツト銃の強化の禁止条約がある  
ハリス達はそれを知った上でこれを秘密裏に作った。

しかし颯は

「ふふ、改良してはいけないのはマスケツト銃と聞きました。しか  
しこれは後装式のライフリングの銃。つまり新式でありその条約に  
はひっつかからないと言ったら？まあまだ公表せずにして、災厄の危  
機が拡大したら売り出せば条約関係なく購入してくれそうですし、  
既に考えが…」

グラ ションはまたポカンとしてからクツクツと笑い。

「あなたは面白い、面白い人だ。スフィア、彼はいつもこんな感じ  
かい？」

「ええ、少し無茶が激しいですが、実直で素晴らしい方です」

とスフィアは微笑して素直に評価する。颯はストレート評価に嬉し  
く感じる。そして

「グラ ションさん。少し領主みたいな仕事していいですか？」  
「おう、俺はあなたを気に入った。何だかやってくれそうな気がするよ」

グラ ションは笑って許可する。ファ バ の方を見ると、彼も黙って頷く。

2人には颯はこのライトフィナルを変えてくれると直感で思ったからだ。

颯は信任を得ると、素早くハリスの所に向かい。

「ハリスさん、話があります」

「何でしょう領主様」

颯の言葉にハリスは向く。

「まず銃の名前を教えてくださいませんか？」

「ふむ、これは私が設計した図を、ここの職人達は私を全幅の信頼を以て完成したものだから、この領の名前のライトを取ってフィナル銃にしようとなりました。なのでこれはフィナル銃第一号です」

ハリスは興奮しながら言う。颯は聞いてから

「なるほど…それじゃあそのフィナル銃に関して私から2つ提案が。銃職人の皆さんも聞いて下さい」

颯は全員の視線を集める。そして

「まず一つ目。我々ライトフィナルはこのフィナル銃を条約違反ではない銃と認定して、そして常備軍防衛力拡充の為に正式に購入したい!!!」

颯の宣言と同時に皆が沸き立つ。そして2つ目…これが重要だ。

「二つ目は、この銃の品質の均一化や更なる発展、そして一度衰退しかけの銃産業の人材育成や今後輸出には多くの知恵とお金が必要です。だから…」

颯は一旦間を置き、そして

「我々と契約して会社をつくりませんか？」

事実上の銃器公社宣言をした。

暗雲と商売作戦 前編（前書き）

後編は少し間が空く可能性が高いです。申し訳ありません。

## 暗雲と商売作戦 前編

颯がライトフィナル赴任して一週間  
サベルレピア王城

「派遣した矢先にこうなるとはな…」

笑えねえ…とナルシヤンは呟きながら一枚の報告書をひらひらさせながら片手で目を覆い椅子に背もたれる。

「どうかいたしましたか？ナルシヤン様」

彼の唯一の専属メイドのニミッツが聞く。

「いやな、問題があつてな…これを見てみな」

ナルシヤンはさっきまで読んでた紙を渡す。ニミッツは絶対に口が堅く、さらに相棒みたいなものなので躊躇いはない。彼女も

「拝見します」

素早く目を走らせる。

内容は深刻で、ヘイアス自由国の裏の世界の干渉を表にいかないようにする為に作られ任命された一族の長が重い病を患い危篤で、裏の世界の力が表に溢れ初め、更に聖十字教会の信仰に篤い国と交易に反対する輩が密かに悪事を企んでいる可能性が…と

「！、これは…交易どころか国がまずいのでは？」

すぐに理解する。ナルシヤンは首を振り

「いや、それを言うのは時期尚早だ。これは裏の話でありまだ表は友好だ。引き上げたら各方面から非難が出る」

既に4日前にヘイアスに向けて大商人から個人商人まで400隊3000を越える人々で構成される最初の国家事業の大交易団が向かっている。このまま彼らは途中合流も含め最終的には1300隊7000名規模まで膨れあがる。

ルートは颯達が使用しなかった安全な左周りルートで、遅くとも、ふた月でヘイアス到着を予定している。

「しかし何故こんな大規模な…」

ニミッツは呆れ口調

「世辞にも経済が強いと言えないこの国を誇張したい見栄かはたまた無知か……まあ歴戦の商人は前者、世襲でとりあえずやるボンボンは後者、魔導貴族院の商人貴族は両方かな…まあそれ以上にこの制限無き博打のチャンス欲する者達がうごめいているからか…これが厄介だ」

ナルシャンも呆れ口調で返す。

この交易は最初にして最重要。まだ手がついてない未開拓の地に早くコネを作り商人としての株を上げたいと切望する個人や新米、小規模商人が全体の7割以上を占める。

これも国が無制限に交易団の加入をさせたからだ。

彼らはこのチャンスをもにしようと同様なものを犠牲にしている。ナルシャンの手元にある報告書は交易自体が危ないと感じさせるものだが、無理に引き上げてしまえばその犠牲をしてまで参加した商人から総崩れで経済は大変な事態に陥り、何もなければ身勝手すぎる国際条約破棄と各方面からの強烈な非難は免れない。

さらに国費も多量にかけた事業を潰すも等しく国の権威も失墜して、今も道中の各領地の統治貴族、平民の補給支援や寝床確保のなどが無駄になり、通常の請求代金+途方もない賠償金問題も発生する可能性もなくもない。

「まあ、まだ大きくは出来ないが、もしもの危機的状況を想定して正規西部軍に通達と上に上申しておくが…情報は正確でも出どころが正規じゃないし、最近やりすぎて皆から嫌われて正直聞く耳持つとは思えないな」

宰相なのにな〜と、苦笑と自虐しながらナルシャンは言う。

昔よりかは大分マシになったが、せっかく追い出せると思ったライトフィナルの領主を颯に任せて宰相に居続け、さらに宣戦布告したナルシャンとメルシャン分家筆頭の最大派閥の貴族派との対立は決定的になり、今まで宰相を陰ながら支援してた宰相派も随分と大

変で、驚異的な結束力で何とか凌いでいるが：

ニミッツはそれを見て

「失礼を承知で申し上げます。冗談でも弱気になるのは早いかと、これをチャンスに変える大胆な貴方が居ますから宰相派貴族の皆様が信仰の対象以上に奮戦していると思えますが」  
もちろん私も…という言葉は伏せておく。

しばらく黙った後、ナルシヤンはクツクツと笑い

「そうだなあ、戦う前から言う事じゃないか、チャンスに変えるねえ…」

椅子から立ち上がると

「ありがとうございます」

「~~~~~!」

ナルシヤンは数度と軽く撫でる。固まるニミッツ。そんなウブな反応を楽しんでから

「それじゃひとつ走り得上申と出来たら謁見してくるわ、少し留守頼んだ」

「え…あ、はい。行ってらっしゃいませ」

ナルシヤンが執務室から退室するのをニミッツは深々と礼して見送る。立ち去るのを確認してから彼女はしばらくの間頬が緩むのが止められなかったのは内緒だ。

そして戻ってライトファイナル

颯が来てから一週間、この領地には少しずつ変わった部分が出た。

まず颯が提唱したファイナル銃の大量生産の為に公社設立経理などは文官に任せ、そしてハリス筆頭に研究部門も作りあげた。

マスケット銃の生産減少の30年間の不遇の時代で大減少した銃職人だが、それでも数は何とか確保して今は後継者兼作業員の若者を大量雇用、分担制で生産を開始しようと修練している。

まずは2ヶ月で800挺の生産を目標にして、ハイアス交易団が来

たら護衛と同時にこの銃を御披露する。災厄の決戦までに本格的に生産ラインを確立させる。

さらに戦争道具だけでなくこの領の特産品の大理石、木材、そして元銃職人と弟子が作る高い技術の細工品を今までより輸出強化を狙う。これも銃と一緒に2ヶ月後に御披露目だ。

自然の物に関しては計画生産をして高価な天然林、石でブランド力を高める予定だ。

常備軍も最大限に活用し、交易路の整備名目で領への道の改修工事の公共事業も着手し、同時に短期雇用も創出する。

ちなみに常備軍も新たな編成を検討している。

この領は潜在的な能力はハイレベルなので徹底的に利用する。

これで一応は内需の限界にあぶれた若者の救済と、年々減少にある出生率の回復に期待する。

しかしまだ問題点はある。大半が領の金庫から資金拠出してゐるからだ。

これはあくまで一時凌ぎ、まだ金庫には埋蔵金のようにあるが無尽蔵でないし、これからは大規模な事柄が続く事態に金が無いのは本末転倒だ。だから外貨獲得にも奔走しなければならない。

ならば

「越荷方…ですか…」

「まあゆくゆくはの最終目標としてですけど」

屋敷では颯は精力的に働き、領民も面白い人が来たと、若者からは家族を養えると評判は上々だ。

しかしそれ以上に精力的なのは今、颯の目の前のソファアに座る老練な方、前代文官子爵ヘリオス家当主にして「ヘリオス爺」の愛称で親しまれる、サゲン・ニス・ヘリオスである。

当初、颯の計画に対応出来る人材が居なかったが、噂を聞きつけたサゲンは颯の計画に賛同してここまでの大量の仕事を片付けた。そ

の仕事ぶりは人間ではない。

ちなみに他のスフィア、ソニック達には軍隊教練、サラには魔術師として、この地元で常駐出来る魔術師の育成計画と予算を記すように頼んでいる。

颯は説明を続ける。

「越荷方とは、ここを中間点にして、シグラド帝国の輸入品をここで一時保管、それをサベルレピア商人に原価+手数料で売ります。そしてサベルレピアの商品を輸入してこれもまた空荷になった帝国商人に売ったり、リクエスト品を輸入して期日に渡したりと、まあ仲介をします。ここでは我々ライトフィナルの商人も拡充出来て、さらに商人の一時休憩などでお金が落ちますし、色んな所で外貨獲得可能になります。そして最大の利点は帝国という大規模市場直通で関税が安いので王国は塩が安くなるし我々は手数料儲けの万々歳」

「ふむ…まあ悪くない話だが前提が抜けている。帝国の脅威と法国の圧力と王国の叱責とヘアアスの交易に喧嘩売りますぞ」  
白くフサフサの白髭を撫でるサゲンが言う。

「ですから最終目標です。今は来る災厄の前にそれなりの改革を進めたいですし、何より領民が付いていける限界スピードを少しオバしているの…あくまで理想論ですよ」

颯はなんなく返す。領民をせかしているのは自覚している。だが、このくらいやって丁度良いとも思っている。

「ですけども、商人魂は宗教を越える事も加味すれば完全なる不可能ではないと思います」

「それはそうですね…しかし国家間の話ですのでこれは置きましょう。それよりも私が気にするのはもっと現実的な、ヘアアス交易団の交渉のプロです」

「ですよね〜」

颯の悩みの種はもっぱらこれだ。交易団に見せる技術、製品が良くても、それを売りに行ける交渉に長けた人間が少ないのだ……いや

正確には商売のプロが居ないのだ。

商人組合の人間は昔からの太いパイプでのんびりやっていたので交渉出来る人材が高齢者が多く、文官の交渉人は在籍するが商売関連は基本未経験に等しい。

「商人達も学歴とか気にしますか？」

「はつきりは言えんが、まあ高等教育の学園卒業者、特にベルグランドのセルシオ学園八年生卒業生が交渉に当たれば一番の理想ですね」

「今からスカウトは！」

「手遅れ…」

「ガクッ！」

やっぱりセルシオ学園祭の時にスカウト出来れば……！！  
今更ながらの後悔をした時、扉がノックされずに

「グラム エリート制服学生美女がキタ ……！！そして領主様はどこですか?!」

「落ち着けエエエ!!目の前におわす方が新領主だ」

転がり込むのはライトフィナルでは一番実績と信頼が高く老舗商人の若頭だ。サゲンが湯を入れると彼はすみませんと謝ってそして落ち着く。

「と…とにかく何があった？」

颯は若干引き気味で答える

「あ、はい…今回ベルグラントに細工品などを卸に行った時に、是非とも同乗したいとセルシオ学園の女生徒が…しかも領主様を知っている…」

グラム で俺を知っているセルシオの女生徒……まさか

「お久しぶりです、学園祭以来ですね」

「まさか予想通りとは…」

現れたのはセルシオ学園史上最高にして変人なセルティリア・ミル・テゼ

「テゼ公爵のお嬢さんか…わざわざ遠い所に」

「あなたがサゲン・ニス・ヘリオスさんですか…お久しぶりです」  
2人は知り合いなのか笑い合う。それよりも

「なぜここに？」

「あれ？話が伝わっていませんか？私はセルシオ学園の卒業式には  
出ずに証書だけ貰う略式卒業を終え、ここ、ライトフィナル一等  
文官に配属される事に志望して来ました」

「なんと！！」

さらりとセルティリアが言い、サゲンが驚愕する。

「一等文官は四年卒業生でも安い月給を知った上で来たのですか？」

「ええ、私には知りたい事がありましたので。その為なら学歴も喜  
んで捨てますし、給料は生活分あれば十分なので」

知りたい事が颯とサラについてとの事は伏せる。

「なんと決断力のある子だ」

サゲンは呆れる。一方、颯は

「セルティリアさん、あなたは交渉事は」

「得意中の得意です」

「サゲンさん…」

「まさかと思うが…本気なんだな？」

颯はサゲンの方を向き、サゲンは片手をひらひら振って許可を出す。

「何やら楽しい雰囲気だ」

「まあセルティリアさんには楽しいかもしれないかな…改めて仕事を  
頼みたい」

「イエス・ボス、何なりと」

颯はセルティリアに交易団殴り込み交渉の計画について口を開く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0494x/>

---

異世界統治日記

2011年10月22日02時11分発行